

---

# ジャッジマスター ~ 1 Mission ~

雷禅 神衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジャッジマスター 1 Mission

### 【Nコード】

N7702G

### 【作者名】

雷禅 神衣

### 【あらすじ】

「天誅、死神」・・・裏社会で最も恐れられている男の名前。彼の本名を知る者は極限られた人間のみ悪事が動く場所に、天誅、死神は決して現れる。それがいつしか伝説と化し、裏社会では死神として彼を恐れていた。しかし、彼を見た者は誰一人生き残れないと言つ恐ろしい事実が存在する。裏社会で暗躍する「天誅、死神」の正体・・・。天誅、死神はいつも警察の一步先に行く。彼に抹殺される人間たちは皆悪の世界に身を置く罪人たちばかり。裏社会で暗躍する「天誅、死神」そして彼をサポートする女影・・・。裏社

会の最深部、「魔界」では彼の事をこう呼んだ。「ジャツジマスタ  
ー」と。。。

## 第一話「ジャッジマスター」

「う、う、うわあああっ!!」

男はあまりの恐怖に逃げ出した。自分たちのアジトと言つ事もあつて、走る速度は速く、動きは俊敏だ。

「コン・・・コン・・・コン・・・」

後ろから迫り来る革靴の音。時折「ピチャ」と言つ水分の音が含まれるのは床と共に血溜まりを踏みつけているせいだ。

逃げ惑う男の背後から別の男が迫ってくる。決して走ろうとはしないが、確実にターゲットを追い詰めている。

「うわっ!!」

男は白い粉の入った袋に躓き、派手に転倒した。その際額を激しく強打してしまい、わずかに血が滲んでいる。

「コン・・・」

「ひっ!!やめろ!!止めてくれえ・・・頼む、何でもするから命だけは・・・!」

「哀れなもんだな。自分で集めたヤクに躓き、ヤクの中にコケるとは」

転倒した男の顔には白い粉末がこびり付いている。上物のヘロインだ。

わずか1グラムで数十万と言つ値がつく代物である。

男の声は不穩そのものだった。

身長は有に180を超えているだろうか。全身に黒いスーツを纏い、その上にブラックレザーのロングコートを羽織っている。

頭にはウエスタンハットを被り、髪は腰まで伸びており色は金髪。

ウエスタンハットを深々と被っているせいで表情までは見えないが、まるで不敵な笑みを浮かべているようにも思える。

「こ、これ・・・商売なんだ・・・これでも列記とした商売さ・・・」

「商売？非合法で人を騙し、その効果は人間を廃人とさせる・・・それが商売だと？」

ウエスタンハットの男はポケットの手を突っ込んだまま、ジリジリと迫ってくる。

「そもそもあ、あんたはなんなんだ！我々にどんな恨みがあってこんな・・・」

「恨みなどない」

「だ、だったら何故こ、こ、こんな酷い事を・・・」

酷い事・・・それはこの男によって惨殺された仲間の事だった。

彼の仲間はこの男の手によって惨たらしい死を遂げた。頭部を切断された者。皮を剥がれた者。

眼球を抉り出された者。いずれも見るも無惨な死がそこかしこに転がっている。

「あ、あんたは・・・」

「死神・・・」

「えっ・・・」

「俺はお前の死神だ」

「し、し、し、し、死神っ！！」

男は失禁した。

「悪には悪を持って征する。悪に善意や更正など必要ない」

死神と名乗った男は更に男に近づいた。

「この世には悪でしか征する事ができない悪がある。法律や憲法など役に立たん世界がな」

「ひっ！！や、やめろ！！」

「俺は死神。死を司る者。お前の死は俺がジャッジする」

「うぎゃああああああっ！！」

その瞬間、麻薬売買の常習犯だった男の首は、無惨にも宙を舞った。

「皮肉なもんだ。悪人でも血だけは綺麗なんだからな」

死神は首の飛んだ男の血液を指に滲ませ、白紙の紙にこう書いた。

「天誅、死神」……と。

「殺害された男は麻薬組織の幹部としても有名な人物で、警視庁でもマークしていた人物だったようです。

この麻薬組織は日本のみならず、アジア近辺で巨大なマーケットを所有しており

様々な国による多国籍の巨大麻薬組織である事が分かりました。

日本の暴力団を始め、チャイニーズマフィアなども関わっていると見られており

組織の根絶、そして天誅、死神の行方を追っています。では次の二ユースです……」

仕事から帰った死神はソファに腰を下ろし、テレビを眺めていた。

やはり思ったとおりあの男は麻薬組織の幹部だったようだ。さすがパートナーが調べた情報だけあって適格だった。

死神はテレビを消すと、静かに目を閉じた。どうやら雨が降り出してきたらしい。窓に打ち付ける雨音が響いた。

死神……男の本名は黒神くろがみ 歪巷ひずみでは「天誅、死神」として名が通っている。

歪には様々な呼び方がある。まずは本名の「歪」これはパートナーの夜美也 紅麗くれいだけが使う名前だ。

「天誅、死神」、そして裏社会の最深部「魔界」の住人が着けた「ジャツジマスター」と言う名前。

彼を形容する名前は3つある。これだけあるとどれが自分の本性なのか分からなくなりそうだが

当の歪はそうでもないと思っている。どれも自分であって自分では無いのだ。

「ああもついきなり降り出すんだからあ……」

テレビの音が消えた無音の部屋に、今では慣れきってしまった紅麗の声が響く。

相変わらず騒々しい事この上ない。おまけに声質が高いため、時折耳障りだなと思うときがある。

「あれ、帰ってたんだ。相変わらず仕事が早いわね」

「出なきや始末屋家業なんてやってられんさ」

「それもそうね」

紅麗は買い物袋から食材を取り出すと、それを冷蔵庫に詰めた。

夜美也 紅麗歪の知っている限りでは歳は21歳。変わった苗字と名前だが性別は女だ。

160にも満たない身長は、180を超える歪とは大人と子供ほどの差がある。

髪型はセミロングで色はブラウン。赤縁の眼鏡を掛けており表情はあどけない。

これでロングヘアー、長身であれば大手企業の秘書のような風貌になるだろう。

事実、紅麗はそういうタイプに成りたかったらしいが、その辺は理想と現実の差だろう。

「約束のお金、振り込まれてたよ。ねえ、今度バッグ買って良い？」  
紅麗の甘える声は危険だ。いつも何か欲しがる時はこうして声のトーンが甘くなる。

バッグだの化粧品だの、何かと金の掛かる女の費用は馬鹿にならない。

「自分の取り分の中からなら好きに使え」

歪は素っ気無く言った。

「たまには乙女にプレゼントしようとか思わないわけ？私、一度も歪からプレゼント貰った事ないな」

「プレゼントするほど金に困っているとは思えんが」

「まったく、仕事に関しては超一流だけど、女の扱いは三流以下よね、歪って」

「一流には一流の扱いを。三流には三流の扱いをするのが俺のやり方だ」

「あらそう・・・ってそれって私が三流ってこと!？」

「違うのか？」

「キイイ!今度その口にダイナマイト突っ込んでやるから！」

「楽しみだ」

「憎たらしい!!!死んじやえ!バカ！」

「死神に死ねとは穏やかじゃないな」

「フン！」

いつものやり取りだ。歪とは正反対の性格を持つ紅麗とはいつもこんな感じなのである。

歪は紅麗が持ってきた新聞を広げた。案の定一面は「天誅、死神事件」が掲載されている。

自分で起こした事件の記事を、自分で眺めるのは妙な気分だが、悪くない。

「ところで、あの男が麻薬組織の幹部だと何処で知ったんだ？」

「ふふん。凄いでしょ。今はネットワークで繋がっててね、何でも分かる時代なのよ」

「これで連中に天誅、死神が知れたわけか」

「いつか襲ってくるかな」

「さあな。俺だと分からん限り無理だろう。いずれにしてもそれからそれで好都合だがな」

「殺っちゃうって」

「そうだ。いずれその時がやって来る。遅いか速いかの差に過ぎん」

「それはそうと、次の仕事の依頼入って来てるよ」

「表か?それとも裏か？」

「ウ・ラ」

表と裏。これは歪の仕事の世界を示している。表は「何でも屋」裏は「始末屋」という事になる。

「依頼者は女性で、詳しい事は良く分からないんだけど、詐欺にあつたみたい。」

お金は取られ、おまけに妊娠までさせられたらしいわ。子供は結局

墮ろしたみたいだけど」

「ターゲットは男か」

「うん。だけどこの男が癖者よ。この界限では有名なヤツみたい」

「つまり詐欺の常習か」

「そう。彼女が言うには殺して欲しいって。報酬のことも話したらOKだったさ。現金ですぐに払えますって」

「金持ちの考える事は分からんな。それだけの金があるなら詐欺の男などすぐに忘れ、金の力で解決できそうなものだが」

「それがそうも行かないみたい。実はその詐欺男は彼女の初恋の人らしいのよね」

「初恋？」

「うん。小学生の頃一緒だったらしいんだけどね。あれから数十年経って、まさか初恋の人が詐欺の常習犯になっていたなんて、私でもシヨック受けそう」

「なるほど、初恋だからこそ増殖した憎しみか」

「そう。初恋の人だったからこそ許せないみたい」

「なかなか面白いな。良いだろう引き受けてやる」

「交渉成立ね」

「お前は依頼人に会いに行け。俺はその男の素性を洗う」

「分かった」

気が付くと雨は止んでいた。どうやら通り雨のようだったらしい。

歪はウエスタンハットを被り、ブラックレザーのコートを羽織った。また悪が一つこの世を去る。悪を抹殺し、それと引き換えに報酬を頂く。

それが歪の仕事であり、悪を征する絶対的な方法論。

今宵もまた、血の雨が降りそうな兆しだった・・・。

E  
N  
D

## 第二話 「汚された初恋」

昨日から降り続いていた雨は明け方には上がった。

紅麗は着替えを済ませると、全身鏡の前に立ちその容姿に余念が無いかチエツクした。

大丈夫問題無し……。鏡の自分に向かって微笑んでみせる。自分で言うのも変だが可愛い笑顔だと思う。

これで身長がもう少しあれば理想としている自分の姿にまた一歩近づくのだが

神様は人間に全てを与えるような真似はしない。現実の自分を見るとつくづくそう思うのだった。

無い身長のカバーは笑顔で補え！それが紅麗のモットーである。

依頼主との約束までまだ1時間ほど時間があった。ジーンズのパンツにブラウンのジャケット。それが一番動き易い紅麗のお気に入りだった。

紅麗はバッグの中身を確認した。化粧道具にエチケット関係。そして拳銃。

もはや見慣れてしまった拳銃だが、これを持つようにと言ったのは歪だった。

「万が一のためだ」

そう言った歪の表情は鉄兜のように冷たい。歪は紅麗が危険に晒されるのを恐れているのではない。

単純に紅麗が殺された後の始末が厄介だと、そう思っている。自分の身を案じてくれた拳銃ではなかった。

だがそんなこと紅麗も分かっていた。歪は自分を女として見ていない。女どころか仲間として見ているのかさえ疑問だ。

彼は仕事のためにしか動かない人間なのだ。誰を守る事も善しとせず、守る事を忌み嫌う節さえも感じられる。

それが証拠に一緒に住んでいるのに、今以上の関係にはならず居

る。

きつと歪は例え自分が居なくなっても悲しむ事はないんだろう。むしろ世話の掛かる人間が居なくなつて喜ぶかも知れない。

歪はそう言う男。それは紅麗も分かつていた。

だがその反面、そういう状況だからこそ、歪の前では女でありたいと思う気持ちもあつた。

彼の役に立てるならそれで良い。それで尚且つ女としている事が紅麗の願いだ。

血と殺戮、そして悪が渦を巻く世界で、少しでもオアシスのような空間を歪に作つてあげること。

それが自分の役目だといつても肝に銘じていた。

女として扱われなくても良い。自分が何かの役に立つのならそれで・  
・・。

鏡に映つた紅麗の顔は間違いなく女の顔だつた。頬が少々赤く染まつているのが何よりの証拠だ。

「さて！お仕事お仕事！」

紅麗はバッグを持ち、部屋を出た。

彼女の部屋の外は歪との共同のリビングになっており、テレビや家具などが置かれている。

ふと見ると、テーブルの上にホットドッグが皿に乗っていた。

紅麗は近寄ると、皿の隣に置手紙があるのを見つけた。

「腐る前に食え」

手紙にはそう書かれていた。恐らく歪が出かける際作つたのだろう。以前「一つ作るのも二つ作るのも同じ事だ」と言つていた。

自分の分だけ作るつもりだつたのだが、それ用のパンが二つあつただから歪は紅麗の分まで作つたのだ。

紅麗はなんだか可笑しくなつた。普通なら「食べて良いよ」とか「

お前の分」とか書きそうなものだが

「腐る前に食え」と言つのはあまりにも遠回しな言い方である。

紅麗は彼の言いたい事は理解できた。このままホットドッグを放置

しておけば、やがて腐る。

その前に起きて食べると言いたいのだ。つまり「ちゃんと起きろ」だ。

紅麗は何度か寝坊して依頼人と会う約束の時間を過ぎたことがある。歪はそれを遠回しに小ばかりにしているのだ。

「フフフ・アハハ！おっかしい」

まったく持って捻じ曲がった男である。

だが歪のこういふ一面も知っているからこそ、彼の良きパートナーで居られるんだろう。それは素直に嬉しかった。

紅麗はホットドッグを口に含んだ。

「マズ！！つうか、マスタード入れ過ぎよ・・・」

高見<sup>たかみ</sup> 光<sup>ひかる</sup>は約束の時間よりも15分ほど早く着いてしまった。

それには分けがあつた。あの痛い経験以来、現金は必要なときに家から持っていくと言うスタイルを取っている光だったが

今日は違う。財布とは別に分厚い茶封筒を持っている。その中には契約金の前金として300万もの現金が納まっているのだ。

そのため何処か緊張してしまい、いつもの時間間隔が麻痺し、約束の時間よりも早く着いてしまったのだ。

前金があれば後金もある。依頼料は総額500万円。お世辞でも安いとは言えない金額だが

500万円で積もりに積もった恨みを、自分では無い別の人間が晴らしてくれる。しかもその事で光の手や経歴は一切汚れない。

それに殺人と言う現実を踏まえれば安いものである。依頼先の人間はあの男の命に500万と言う値段を付けたのだった。

光には殺したいほど憎い男が居た。彼さえ居なければ光の人生は光り輝いていたのだ。

彼の出現が光の人生全てを奪つたと言っても過言ではない。

男の名前は小向<sup>こむかい</sup> 宮地<sup>みやじ</sup> 年齢は光と同じく28である。

宮地とは小学校の頃からの同級生で、光の初恋の相手だった。当時

野球部に所属し、ピッチャーをやっていた彼は一際輝いていた。中学に上がっても野球を続け、持ち前の甘いマスクで女子生徒から人気を得ていた男である。

小学校の頃から好きになり、その気持ちは中学、高校まで途切れる事はなかった。

宮地はいつも光を見て「可愛いな」と言ってくれた。セリフだけで考えれば在り来たりな言葉であるが

下心を感じない分、信憑性を感じてしまったのだろう。今思えばそう思ってしまった自分にも非はあったと思えるのだが

当時の若かりし自分では、まさかこの先詐欺に合う事など想像も付かない。

やがて時は流れ二人は大人の関係へと発展して行った。

人間誰でも初恋の相手と言うのは忘れないものだ。それだけ強烈な経験であることに加え、嫌いになることはあまり無い。

久しぶりに再会して相手の風貌が劇的に変化していない限り、ほろ苦い過去が蘇り軽い緊張感を覚えるものだ。

しかし光の場合は再会と言うものが無い。初恋にして彼を手中に収めてしまったために、彼に対する執着心は凄まじいものがあった。

最初は些細な事だった。「悪いんだけど千円貸してくれないかな？」光は疑いもせず貸した。

その後も金を貸してくれと言う言葉が増えて行ったが、その度に彼は返して来たので、何の不安も感じてなかった。

だが20歳を過ぎたある日、二人の間で同棲の話が持ち上がった。

「一緒に住もうか」と言い出したのは宮地の方だった。光は飛び上がるほど嬉しかった。

「初恋は実らない」と言う言葉は嘘だと、光は心からそう思ったのだ。

しかし一緒に住むためにはそれなりにまとまった金が必要となる。

二人はお互いにどれくらいの貯蓄があるのか話し合った。

その結果、宮地よりも光の方が貯蓄額が上である事が判明した。

この時点で宮地は既に光の銀行の口座番号と暗証番号を知っていた。それは何故か？

同棲の話が持ち上がったのとはほぼ同時期に宮地は「実は企業を起こしたい」と言い出し

更に光が妊娠している事が発覚したのだ。企業を起こすには金が必要。宮地は言葉巧みに光を誘導し

光の口座番号と暗証番号を聞き出したのだ。

妊娠が発覚した光は安静のために、同棲先の住居の確保や、出産に備えての準備などを全て宮地に任せてしまった。

それから先の崩壊は見事なまでに迅速だった。

まるで光の妊娠から逃げるように宮地と連絡が付かなくなった。おまけに銀行の口座から現金が全て引き出される始末。

何度携帯電話に掛けてみても繋がらない。どうやら宮地は使い捨てのプリペイド式携帯を偽名で使っていたようだ。

宮地の家にも行ってみた。しかしそこに家は無く、あるのは開発中の野原だけだった。

最初は意味が分からなかった光も、徐々に自分が騙された事実気付いた。

その後光は様々な人脈を伝って宮地の実態を知った。

驚いた事に自分と同じ被害に合った女性が、光の他にも数名いたのだ。

しかも騙された時期が皆同じだったのだ。つまり彼は光と関係を続けながら別の女性も同時に騙していたと言う事になる。

世の中には自己防衛の気薄な女が居る。好きになってしまい視野が狭くなってしまったために男に騙されると言うケースだ。

ホストに貢ぐバカな女たちと同じだ。人間は恋をすると盲目になり、バカになる。

その顕著な例が光だったと言えよう。ましてや光は宮地以外の男を知らない。

初恋がそのまま発展し、光の知る男は宮地ただ一人だったのが最大

の原因だ。男を知らなさ過ぎたのだ。

男はいつまでも子供で夢ばかり見ている……これは女性の間でよく聞く言葉だが

何も全ての男がそれだとは断言できない。したたかで容赦のない男も確かに存在するのだ。

光や他の女たちが男の本質を知っていれば、あるいは回避できた詐欺だったかも知れない。

バカな男も多いが、同時にバカな女も多いと言う事だ。

まさか初恋の相手が詐欺師だったとは夢にも思っただけでなかった光の憎悪は、日に日に大きくなった。

光はその後宿していた我が子を墮ろす結果となった。それから宮地を殺そうと決心するまでの3年間は必至になって金を貯めた。

25歳から28歳までのこの3年間は、屈辱と苦痛に塗れた3年間だった。

「いつか殺してやる」その思いは3年経った今でも色濃く残っているのだ。

初恋の成就、そして妊娠、同棲……。この経路はある意味での邪道である。

もし光がこの邪道と言える道を歩んでいなかったら、今頃幸せだったかも知れない。

初恋が実ってしまっただけの衝撃は、3年間と言う殺意を増殖させるに相応しい現実だったのだ。

「初恋が実らねなければ良かった」

光は今でもそう思うときがあった。

そんな折、インターネットで「始末屋」と言うサイトを偶然見つけてしまった。

始末屋は海外経由のサーバーを利用しており、何十にも施されたセキュリティの関門を突破しない限り辿り着けない境地である。

何故光のような善良な市民が辿り着けたかと言うと、某掲示板でこ

のサイトが話題になっていたのだ。

その掲示板は裏社会に生息する人間のみが入ることを許されるサイトで、ネット上の知人から入場のパスワードを教えてもらう事に成功した。

そしてその掲示板で「始末屋」の事を知ったのである。

「貴方に代わって代行殺人を行ないます」この言葉は光の救いとなつた。

明記された連絡先に電話を入れると、意外なことに可愛い声をした女性が出た。その事実には若干拍子抜けだったが

光は宮地の件を話し、彼を殺して欲しいと願い出たのだ。

そして今、光は指定された約束の場所。新宿の繁華街にある裏路地に来ていた。

この裏路地は両脇に高層ビルが立っているため、昼間でも薄暗い。店なども無いため人気は極端に少なかった。

光はその裏路地で行き止まりの壁を正面にして立っていると告げられた。

つまり光の目の前には行き止まりの壁があり、背後に繁華街に戻る道があると言う形だ。

相手の女性は光がその体制を取らない限り、会いに行く事は出来なと言った。

おそらく相手に顔を見られるのとまずいだろう。何せ人を殺す仕事をしているのだ。当然と言えば当然である。

時刻は約束の時間ちょうどを刻んだ。すると光の背後に足音が響き、真後ろでそれが止まった。

「こんにちは。高見光さんですね」

その声は電話の受け答えをした女の声と同じだった。

「はい」

「そのままの体制で聞いてください。決して振り向かないように。万が一こちらを振り返ったら貴方の命はここで消えます」

身の毛もよだつとはこの事だった。今自分の真後ろに狂気があるの

だ。

「約束のお金は持ってきましたか？」

「はい、バッグの中に入ってます。あの、茶封筒に入って」

「分かりました。ではバッグから取り出して、右側にあるドラム缶の上に置いてください」

「はい」

光は言われたとおり、300万円の入った茶封筒をドラム缶の上に置いた。

すると女は前に向かって歩き出し、ドラム缶の上に置かれた茶封筒を掴んだ。

光の視界の隅にブラウンのジャケットを着た細い腕が映った。

「残りの金額はこの後2時間以内に先日指定した銀行に振り込んでください。振込みを確認次第、仕事を開始します。」

万が一振込みが確認できなかった場合は、やはり貴方の命は消えることになりますので、ご注意ください」

「は、はい……」

声そのものは高い声で女性らしいのだが、言葉の端々に狂気を感じる。光の額から冷たい汗が流れた。

「それからこんな事は無いと思いますが、くれぐれも警察などに通報する事はしないように。」

私たちの仕事はお客との信頼関係の名の元に成り立っています。もし警察に通報するようなことがあれば

貴方が私たちに殺人を依頼した事を告白します。そうなれば貴方の人生はそれまでです。

貴方が黙っている限り、私たちも他言はしません。お約束します」  
「分かりました」

「それでは、貴方にとってこの先最良の人生となりますように」

その言葉と共に背後の気配は消え、静かになった。光はしばらくそのままの体制で居たが、やがて振り返ってみた。

だがそこには誰も居なかった……。

E  
N  
D

### 第三話 「お前が選べ」

ターゲットとなる相手の素性を調べる事は、歪に取っては朝飯前だった。

今回の仕事の依頼主から入手したデータを元に、歪は朝早くから動き出していた。

ターゲットの名前は小向 宮地。年齢は28となっているが、これは事実ではなかった。

本当の年来は30歳。28と言う数字を使ったのは相手を騙すために若さを強調するためだろう。

依頼主からのデータでは彼の職業は「企業を立ち上げた青年実業家」と書かれているが、これも嘘だった。

彼の本当の職業は列記とした「詐欺師」だ。それだけで日々食っている。つまり事実上の「無職」である。

宮地は今まで騙した女から刈り取った金だけで悠々自適に生活している。

現在も数名の女を騙しており、彼と同棲している女を含めると、4人もその女を騙している事実が発覚した。

4人全員を別々の場所に住ませ、まるでヒモのように女たちの住居に通っている。

その手口は実に巧妙で、日をずらして通い詰めているため、2日連続で同じ女の場所を訪れる事が無い。

それぞれの女にはまったく異なる職業をやっていると嘘を付き、女の家に来ない日は仕事で忙しいと告げている。

騙す手段も巧妙、且つしたたかで女たちは宮地を疑おうとはしていない様子だった。

「いろいろ調べたんですがね、どうやらその界限では目付けられているらしいですぜ」

歪とは古くからの付き合いがある情報屋のタクが言った。

「その界限とは？」

「暴力団ですわ。宮地のヤローを誘い込み、上納金を稼ごうって手段ですわ」

「なるほど、運営のための資金稼ぎか」

「ええ、それにサツからもマークされてますわ。あのヤローいろんな女騙してやがるから名が知れてんですよ」

「フン、騙される女も女だがな。まあ良い、これだけデータがあれば十分だ」

歪はそう言つとポケットに手を入れ、中から現金を取り出した。金額は10万ほどだった。

それをタクに押し付けると、タクはニヤニヤ不適な笑みを浮かべた。「ダンナにはいつも良くしてもらつて・・・感謝してますぜ」

「これからも頼むぞ。死にたくなかつたらな歪がニヤリと笑う。

「も、勿論ですわ・・・ア、アツシは長いものに巻かれるタイプですんで」

タクはそう言つと逃げるように去つて行つた。

小向 宮地は上機嫌だった。またいつものように女から貢がせ、今日だけでその金額は300万にも登つた。

贅沢さえしなければこれで半年以上は楽に生活が出来る。そう思うと気分は自然と向上した。

それにしても数ヶ月前に自分の子を孕んだ女には参つた。やっぱりコンドームなしでやるもんじゃない。

自分と幼馴染だとか言っていたが、宮地には覚えが無かつた。だが本当はそうなのだろう、あの女と俺は幼馴染。しかしだからどうだと言つのだ。

人間は変わるものだ。金持ちを目指して、金のために人を騙して何が悪い？

そもそも騙される女がバカだから悪いのだ。今の世の中は正直者が

バカを見る。そういう時代なのだ。

人を蹴落とし、自分が申し上がる。それが成功の秘訣。楽しんで生活するルーツってもんよ。

宮地はそう思った自分に酔った。

宮地はマンシヨンの鍵を開け、中に入った。同棲中の秋子は仕事で出かけているため、誰も居なかった。

「今日はいくら稼いでくるか、楽しみだ」

秋子は昼間はパート、夜は水商売で生計を立てている。しかし宮地と出会い同棲することになると

給料の半分は宮地に渡していた。「いつかデツカイ企業を立ち上げるのが俺の夢なんだ」と言い張った宮地に

まさか自分が騙されるとは思っても居ないだろう。面倒見の良い秋子は愚直なまでに宮地を信じ切っていた。

「所詮この世は弱肉強食。弱者は強者にひれ伏すしかないんだよ、アハハハ！」

「良い考え方だな。俺も同感だ」  
「なっ！！」

突然、何者かの声が響いた。

「だ、誰か居るのか!？」

「お前のその考え方には共感できる。しかし、お前は本当の強者を知らない」

「な、なに!？」

「真の強さとは何か、それを知らずして弱肉強食は通用しない」

「どこにいやがるんだ」

宮地は思いつく限りの場所を見て回った。しかし誰も居ない。

「ライオンは自分の子供をわざと崖下に突き落とすと言う。それは厳しい自然の中で生き延びるための親からの試練だ」

「意味不明なこと言いやがって!どこにいるんだ!」

「だが子供を突き落としたライオンも最初は子供。突き落とされる恐怖を知っているからこそ、自分の子供にも同じ事をする。」

「さあ、お前はどうかかな？」

「なにが言いたい!？」

「お前は突き落とされる恐怖を知っているか？親の七光りで生きているお前に、恐怖とは何か、説明できるか？」

「し、知らねえよそんなこと！」

「だろうな。俺が教えてやるよ。突き落とされる恐怖とは何か、お前の言った弱肉強食の理論に従ってな」

「な、なんだとっ！」

「だがそれで終わると思うなよ。お前の死は既に約束されている。お前は強者に殺される運命だ。」

「しかしお前が心から前非を悔い、騙し続けた女に頭を下げると言うのなら生きるチャンスをやるう」

「なに!！」

「お前の余命は残り1日。今から24時間後、お前は確実に死ぬ。改心して生きるか、惨めに死ぬか、お前が選べ」

「そう言う」と男の声は途切れた。

「俺の命が後1日だとっ!ふざけんな！」

「宮地の額から冷たい汗がいくつも流れた。」

「タイムリミットは刻一刻と迫っている……。」

## 第四話 「災い」

「お金、ちゃんと振り込まれてたよ」

「そうか」

「それで、生きるチャンスをやろうだったけ？あの男が本当に改心したら殺さずに生かすの？」

「そう思うか？」

「うん・・・今までの経験を踏まえると、答えはNoね」

「どうしてNoだと分かる」

「だって、今までチャンスをやろうって言ってきた相手は、誰一人歪の提示したチャンスをものにしなかったもん」

「クククク・・・冴えてるな」

「長い付き合いじゃない。歪の知らない歪も知ってるわよ」

「女の方はどうだった？」

「良い感じの人だったよ。約束も守ったし。あんな人の良さそうな人が殺しを依頼するとは！！っていう感じ」

「人は見かけに寄らんものだ。だから騙される」

「まあ、それはあるかも」

「今回の依頼は男も悪いが、依頼者にも原因はある。甘ったれた初恋などいつまでも持ち続けるからバカを見る」

「だけど初恋って大事なのよ。女に取っては」

「じゃあなにか？その大事なものために騙され、孕み、金を奪われても良いと言うのか？」

「そうじゃないけどさ・・・なんていうか・・・」

「世の中には3種類の人間が居る。騙す人間、騙される人間。そして偽善者だ。」

このいずれかが無くなっても人間社会は成立しない。つまり無くてはならない人間たちだ。

しかしな、身の危険は自分で守るのが鉄則だ。それ無くして責任が

どうとか言える立場ではない」

「.....」

「もっと視野を広げて生きるべきだった。まあ今さら嘆いても遅いかな」

悪を破滅に導く歪だが、だからと言って彼は善に回るわけではない。彼が最も嫌うのが「甘さ」であり

現実から目を逸らそうとする人間そのものだった。目を逸らすからこそ悪が見えず

いざその悪が目の前に迫ると怯えるのだと、歪はそう考えている。

悪いものは即刻排除と言う現在の日本に置いて、彼のような考え方はある意味では理想そのもの。

しかしだからと言って彼のやっている事が許される事ではないのもまた事実だった。

歪と何か討論すると紅麗はいつも勝てない。それもそのはず。現実世界がどうであれ紅麗もまた歪の世界の中に居るのだから。

それに歪の言う事はいつも的を得ている。破天荒な部分もあるし、苦笑いをしてしまうような発言もあるが

彼の言うことをまとめると「甘えるな」「自分で守れ」であり、今の日本人に最も欠けている部分を指摘している。

「でも今回はどうやって殺すの？」

「見てのお楽しみさ。あいつの言う弱肉強食の法則に基づいたやり方だ。既に手は打ってある」

宮地の頭の中から「余命1日」と言う声は消えなかった。

それどころか時間と共に恐怖を伴い。嫌な感触を残していく。

本来なら今日も女の所へ行って金をせびる予定だったが、嫌な予感を覚えた宮地は家から一步も出なかった。

宮地は家から出なければ何事も起こらないだろうと考えたのだ。

外へ出ればそれこそ何処で刺されたり、突き落とされるか分かったもんじゃない。

その点家に居れば余計な災いは無いだろう。用は大きなアクションさえ起こさなければ問題は無いはずだ。

同棲中の秋子ももうそろそろ帰ってくる時間だ。あいつが帰ってきたらまず最初に押し倒そう。

性欲を満たしてから今後の事を考えればそれで良い。

謎の男が言っていたリミットまで残り3時間余り。秋子とのプレイを想像しても、頭から離れる事の無い言葉。

「余命1日」そのリミットが迫っている。

いや、大丈夫だ。今日はもう外に出ない。このままやり過ごせば問題ないはずだ。

「ただいま」

ちよつどその時、秋子が帰って来た。宮路はたまらず玄関まで出て行き、秋子に抱きついた。

「ちよつと、なにになに〜」

秋子は笑っている。

「なあ、ベッド行こう。したいんだ」

宮地はそう言いながら秋子の服を脱がしに掛かった。

「ちよつと待って。喉が渴いてるのよ。何か飲ませて、ね。それからでも良いでしょ」

「分かったよ」

「これ買ってきたの」

買い物袋から秋子は缶ビールを2本取り出した。

「一緒に飲みましょう」

「ああ」

そう言えば自分も喉が渴いている事に気付いた。余命1日の言葉に怯え、ほとんど飲まず食わずだったのだ。

宮地は缶ビールのプルタブを開けると、そのまま一気に飲み干した。秋子も喉を鳴らしながらビールを飲んでいる。

しかし、何故かその表情は不敵に笑っている。

「あれ……なんか眠く……」

意識を失う瞬間に見たのは、ニタ〜と笑った秋子の不気味な笑顔だった……。

意識が戻るか否かの境目は快感か不快かのいずれかに別れる。

夢などを見ていた際は不快になり、深い眠りの場合は快感となる。

宮地の感じていた感触は明らかに不快感だった。

全身に痛みが走り、身体中が痙攣している。

そんな中で目を覚ました。

「うはっ!!」

宮地が目を開いた瞬間、その目を狙って強烈なビンタが決った。「ビシッ」と言う音を立てて痛みが走る。

それと同時に巻き起こる「アハハハ」と言う複数の女の声。いずれの声も聞き覚えがあった。

宮地は椅子に縛り付けられており、ビンタの衝撃で椅子が倒れた。

それに伴って宮路も転倒する。

両手足をロープで縛られている上に、その上から強力なガムテープでグルグル巻きにされている。

身体は椅子にガツチリと固定され、おまけに金属の金具で止められているため、身動きがまったく出来なかった。

「秋子……みゆき……恭子……里香……」

宮地の目の前には現在宮地が騙している女たちが勢揃いしていた。

「バ、バカな……ど、どうして……」

「驚いた？そうよね。あなたの騙している女が全員いるんだもの。当然よね」

みゆきが言った。

「よくもまあ騙してくれたわね。まったく気付かなかったわ」

次は里香が言った。

「私は薄々気付いていたけど、まさか自分以外にも居るとは思わなかったわ」

恭子が言う。

「次は私の番ね」

そう言つと秋子は宮地を起こし、持っていた金属バッドを振り上げた。

「や、やめろお！なににする気だ！！」

「見ての通り、ぶつ叩くのよ！！」

「ぎゃあああああつ！！」

秋子の振り下ろした金属バッドは、宮地の右腕を直撃した。凄まじい激痛が走る。

「あああああ……な、なんでなんだ……どうしてこんなことを……」

「知りたい？」

秋子が言つた。宮路は静かに頷いた。

「貴方たち騙されてますよつて、ある人が教えてくれたの。その人は私たちが騙されている証拠を持っていたわ」

「写真付きでね。それで私たちは自分が騙されている事に気付いたつてわけ」

「これは今まで騙してくれたお礼よ。その人は私たちがどれだけあなたを痛めつけようと警察にはバレないと言つたわ」

「何かあつた場合は全て自分が責任を取るから、殴るなり蹴るなり好きにして良いつて。良い男だつたわ」

宮地は「あの男だ」と思った。あの時、宮地の家で聞こえた声の主だ。

「それであなたを眠らせて、拉致したつてわけ」

「そ、そんな……」

「その人は殺さなければ何をしても良いつて言つてたからね。もう少し楽しませてもらうわよ」

そう言つと4人の女たちは縛り付けられている宮路に近づいた。

その手には狂気が握られている。

「や、やめろ……頼むよ、お願いだから止めてくれ……痛いんだ」

「そう痛いよね、可愛そうに」

恭子は優しくそう言った。だが次の瞬間、握っていた木刀で宮地のスネを叩き割った。

「うぎゃあああああつ！！」

「あくらごめんない」

「あつ！私もごめんね」

「ぎゃあうわあああああつ！」

里香は謝りながらも持っていたハサミで宮地の耳たぶを切断した。

「私は謝らないわよ」

「がはあああああつ！」

みゆきは平然としながら持っていたメリケンサックで宮地の頬骨を砕いた。

もはやリンチである。宮路の顔は原型を留めぬほど晴れ上がり、血が流れている。

しかしいずれの攻撃も致命傷には至らないため、死には繋がらなかった。それが余計に苦痛を増殖させる。

身動き一つ取れ無い状況で、攻撃を回避する事は不可能。もはや止まるまで耐えるしかなかった。

「分かる？宮地。私たちはもつと痛かったのよ。身体を弄ばれ、金は奪われ、何もかも失った。

本当は殺してやりたいけど、それをやると罪になるから、この辺で許してあげるわ」

秋子はそう言うと、ヘド口を吐き掛ける様に、宮地に唾を吐き掛けた。

「ど、どぼじて・・・ご、ごんなごどに・・・」

「アハハ！！情けない男ね。これだけ痛めつけばもう再生できないわよ、きつと」

「もう少し顔を殴っておこうかな」

「あ、私もやる」

みゆきと恭子は部屋の片隅にあった棒切れを手に取ると、二人で勢

い良くそれを振り上げ、宮地の顔目掛けて叩き付けた。

「あぎゅあわうえわっ！！ぎゃ、ぎゃべでええ……！！？」

宮地の顔はもはや獣のように醜くなっていた。

「ああ、気が済んだわ。じゃあね」

「じゃあね、バカ男」

4人の女たちは高笑い上げなら去って行った。

宮地は頂垂れた。どうしてこんな事に……。その時、外にある廊下でこちらへ向かってくる足音が響いた。

そして扉が開くと、そこにはウエスタンハットを被り、全身黒尽くめの男が入ってきた。

「ククク……まるでバケモノだな、色男」

男の声はあの時部屋で響いた男の声と同じものだった……。

END

## 第五話 「過ちに気付くとき」

「お、お前だな・・・こんな事しやがったのは!!」

宮地は晴れ上がった顔と口でなんとか日本語を喋った。沸き起こる怒りが彼に最後の力を与えたようだった。

「ご名答。どうだ、楽しかっただろ？」

「ふざけんな!!」

宮地は動けぬ身体でなんとか歪に近づこうとした。だが無駄だった。先ほど女たちに痛めつけられ何かしようものなら激しい痛みが走る。

「お前は一体なんなんだ」

「俺か？俺はこういうもんだ」

そう言うとき歪は一枚の紙切れを出し、宮地に前に投げ捨てた。

「て、天誅・・・し、死神・・・」

そう。そこには紛れも無く「天誅、死神」と書かれていた。

「名前くらいは知っているだろ。俺はお前の死神だ」

宮地の顔から血の気が引いた。天誅、死神は宮地も知っている。かつてない恐怖がジリジリと迫った。

「俺はお前にチャンスをやった。お前が前非を悔い、女たちに頭を下げるなら生きる権利を与えると。」

しかしお前は陳腐なプライドのせいで生きる道を自ら閉ざした。その結果がこれだ」

宮地は口をパク付かせる事しか出来なかった。世に言う暗殺者が自分の目の前にいるのだ。無理も無い。

「お前の余命も残り3分を切ったな。何か言い残す事は無いか？」

「ま、待つてくれよ！どうして俺なんだ。なんで俺を殺すんだよ。もはや宮地の声は情けないまでに狼狽している。藁にもすがり必至で命乞いをしているように見えた。」

「ある人からお前を殺すように頼まれた。俺はその依頼を果たすだけだ」

「か、勘弁してくれよ、いや、勘弁してください・・・なんで、なんでなんだよ」

「ククク、これがお前の知らぬ本当の強者だ。お前はいつも自分より力の弱い女ばかりを狙ってきた。

男から金をかすめようとは思わなかっただろう。弱者しか相手に来ない人間もまた、弱者なのさ」

「あ、あ、あなたは、なんでこんな事をしているんだ」

「世のため人のため・・・と言いたい所だが、お前たちのような悪を始末するのが俺の仕事だ」

「そ、それならあなただつて悪じゃないか！！同じ悪に悪を消す権利なんてないはずだ！」

「この世は弱肉強食だつて言ったのはお前だぜ。強者の悪が、弱者の悪を葬つて何が悪い」

口は災いの元と言うが、まさにそれだった。宮地の言った事は、今歪がやっている事を認める発言だった。

「世の中理不尽な事ばかりだ。日本の法律は当てにならない。だから俺は理不尽な捌きによって罪を免れた悪を

同じ悪と言う世界に住む俺が抹殺する。その方が世のためだからな」

「だ、だけど俺を殺せば殺人だぞ！お前だつて有罪だ！」

「だから？」

「えっ・・・」

「だからなんだと言うんだ？言ったはずだ、俺もまた悪だと。自分が有罪だと言うことくらい分かっている」

「わ、分かつてて殺すのかよ」

「そうだ」

時刻はタイムリミットを迎えた。

「さて、時間だ。個人的な恨みは無いが死んでもらう」

「や、や、やめる・・・頼むよ、何でもするから殺さないでくれ・・・いや、殺さないでください！！」

「無理だな。まあ恨むなら自分を恨め、悪に染まった自分をな」

「ひゃ、やめろお!!」

次の瞬間、宮地の首は同体から離れた。

「フン！善人よりも悪人の血の方が美しいとは、なんとも皮肉な話だ」

歪の足元に、犠牲の頭が転がった……。

その日の夜、仕事から終わって家に帰ると、光はマンションに備え付けられているメールボックスに手を入れ夕刊を取った。

普段なら抜き取った夕刊は部屋に戻ってから見るのが習慣なのだが、どういうわけか今日は奇妙な胸騒ぎを覚え、その場で開いた。

「あっ!!」

新聞の一面を見て、光は驚きの声を上げた。そこには次のように書かれていた。

「今日未明、都内の廃工場で頭部を切断された男性の遺体が発見された。

被害者の名前は小向 宮地。鈍器のようなもので激しく殴られた後、頭部を切断された模様。

小向容疑者は詐欺の常習者である事が判明しており、警察もマークしていた人物だった。

遺体の近くには「天誅、死神」と書かれた紙が落ちていたため、警察は「死神事件」と関連して捜査を進めている。

しかし目撃情報や有力な手掛かりは無く、既に捜査は難航している模様である」

光は驚きと共に安心した。どうやら無事にやってくれたようだった。記事には顔写真も持っており、それは間違いなく宮地だった。

これで目的は果たした。高い金を払って殺害を依頼したのだ。これで全てが完了したのだ。

しかし光の心は晴れなかった。自分が彼を殺してくれと頼んだのである。

つまり殺害を望んだのは光自身。だが世間は光が彼の殺害を依頼した事など知る由も無い。

この結末を望んだのは事実だ。しかし殺害を望んだ事に対する罪悪感はどうあっても消えない。

本当にこれで良かったのだろうか……。

その時、光の背後で人の気配を感じた。気配……いや、独特の威圧感と言って良い。

昨日、依頼先の女性から感じた威圧感よりも更に禍々しい感触。

光の本能が「決して振り返るな」と告げた。振り返ったら殺される……と。

「事実は小説よりも奇なりと言うが、そんな感じか？」

「少しだけ……そんな感じがします」

「そうか。だがそれが殺意の末路だ。決して良いものではない」

「貴方が……天誅、死神さん……なのですか？」

光は恐る恐る聞いてみた。

「そうだ。だからお前が振り返ったらお前の人生はここで終わりだ」  
「……」

凄まじい言葉の狂気である。それほどの殺意を感じないせいで余計に恐怖を感じる。

「仕事は完了した。これで俺たちとお前の関係は終わりだ。もしお前が今心に引つ掛かるものを感じているのだとしたら

それが罪と言う事だろう。しかしお前は有罪にはならない。その分これからも背負って生きるんだな」

「私がした事は……間違っていたんでしょうか……」

「何故そう思う？」

「心が……痛むからです」

「ならば正しかったと言うことだ」

「えっ……」

光には言葉の意味が分からなかった。

「今のお前がもし心に痛みを感じていなかったのなら、それは自分の仕出かした事の重大さに気付いていないと言うことだ。

でも今のお前は自分が計画した事に罪悪感を感じ、心を痛めている。それを知るための殺意だったのさ」

「心を痛めることの・・・」

「そうだ。今回の件でお前はそれを知った。人を恨み、殺意を抱くとその末路に何が待っているか、それを知ったんだ」

光の目に涙が浮かんだ。悲しくも無い、寂しくも無い。だが何故か涙が止まらなかった。

「あの男は悪であり有罪だった。しかしな、安易に騙されたお前も別の意味では有罪なんだ。

これからは人を見る目を養い、自分の道を歩くんだな」

「はい・・・」

「もう二度と悪の世界に入ってくるな。お前のような善人が来れるほど、生易しい世界じゃないからな」

そこで男の声は途切れると、背後に感じた威圧感を見る影も無く消え去った。

気付けば夜。

漆黒の夜空には、満天の星空が広がっていた。

END

第六話 「Guilty or Not Guilty」(1)

「被告人に判決を言い渡す」

裁判長はそこで言葉を区切り、大きく息を吸った。

「被告人は事件当時、極度の精神的異常により、精神分裂症を患っていた可能性は極めて高い。

それ故まだ未成年の被告人に責任能力があるとは断言できない。

よって被告人に無罪を言い渡す」

その瞬間、法廷内にどよめきが起こった。皆一様に信じられないと言葉を使い、その表情は驚愕している。

「よし!!!」

被告人の弁護士、田宮 良一は声には出さずに心でガッツポーズを取った。

「今後は精神病棟での治療に専念し、殺害した被害者への自責の念を常に持ち、社会復帰を目指して欲しい」

「ふざけるな!!!」

裁判長がそう言った時、被害者側の親族席で憎しみの籠った声が上がった。

「冗談じゃない！娘を殺しておいて、無罪だどっ！こんなことがあつてたまるか!!!」

被害者、新山 小春の父、勝次が叫んだ。

「精神病だからなんだと言うんだ、ええっ？人を殺して無罪とはどういうことなんだ!!!」

勝次は席を立ち上がり、鬼の形相で加害者の大場 要おおば かなめに向かって突進した。

咄嗟に警備員たちが勝次を止めに入る。

「日本の裁判は加害者を守るためにあるのか？ええっ？被害者の我々はどうでも良いってのか」

「静粛に。席へお戻りください」

「冗談じゃないぞ、手塩にかけて育てて来た大事な娘を・・・親の我々がどんな思いかお前に分かるか!!」

勝次の必至の形相を見て、大場の顔は引き攣った。

「日本の裁判は何のためにある? ええ? 人を殺してどうして許されるんだ!」

勝次は大場に近づこうともがきながら進もうとする。だが押さえつける警備員の力によつて進路は開けない。

「俺の・・・俺の娘をなんだと思つてんだ!! 大事な・・・大事な娘だったんだ・・・娘を、娘を返せ!!」

最後の方はもはや嗚咽のような声だった。悲痛なまでの叫びに傍聴席の人々は胸を痛めた。

我が子を失つた勝次たち親の気持ちは痛いほど良く分かる。それが故にどうする事もできない現実<sup>み</sup>にただただ唇を噛むしかなかった。

勝次の妻、美紀<sup>みき</sup>は席で泣き崩れている。その泣き声は傍聴席まで届いた。

弁護士の田宮は大場に駆け寄つた、そして彼を守るように立ちはだかる。

「貴様!! そんな人間の弁護なんぞしやがつて!! 許さんぞ!!」

「被告人に弁護士が付くのは法律上の義務です」

「なんだとっ! 貴様、それでも人間か。子供はいるか! ええっ? 子を失つた親の気持ち<sup>み</sup>が貴様に分かるか!」

勝次は警備員に連行され、法廷の外へと繋がる扉へと連れて行かれた。

「許さんぞ・・・絶対に許さんからな! 裁判で裁かれないなら、俺が殺してやる!! 殺してやるぞ!!」

怒気を含んだ凄まじい憎しみの声は、法廷の外まで響いた。

「大丈夫かい?」

「はい・・・」

「もう大丈夫。君は無罪だ。今後は精神病院で観察を受けながらの生活だ」

「あの・・・僕は・・・」

「何も言つな。もう終わったんだから」

「・・・・・・・・」

大場は下を向いたまま田宮の言うことを聞くしかなかった・・・。

女子高生バラバラ殺害事件は、今から2年ほど前に起こった事件だった。

当時18歳だった被害者の新山小春は、学校からの帰宅途中、加害者の大場要に拉致された。

移動手段に車を使った犯行だったが、拉致する際、小春をクロクホルムで眠らせて移動した形跡が見つかった。

自宅に監禁された小春は、それから半年もの間性的暴行を受け続けた。

搜索願を受けた警察が大場要の存在に辿り着いたときには、既に小春はバラバラにされていたのだ。

小春のバラバラになった遺体は大場の家にある庭先の花壇の下から発見された。

死後1週間程度が経過しており、バラバラにされた遺体は腐敗が進んでいたと言つ。

その後、逮捕された大場には7人も弁護士が付くと言つ異例の事態に発展した。

と言つのもこの事件は加害者が未成年である上に、犯行の手段が極めて残忍な事から

被告人に対する死刑の可能性が濃厚と言われていたのだ。

大場に付いた7人の弁護士は皆「死刑廃止運動」に所属する弁護士たちで、田宮良一はそのリーダーだった。

「被告人に対する死刑を無くす」を合言葉に、各メディアからも注目された裁判へと発展して行つた。

一審では死刑が下され、二審では無期懲役が下された。しかし被告人の供述に曖昧な部分が残ると指摘され

最高裁から「精神鑑定」の依頼を受ける事件となった。それにより裁判の争点は精神鑑定の結果によって大きく左右されると言う見方が強まったのだ。精神鑑定の結果、被告人の精神に著しい異常が発見され、精神科医によって正式に精神分裂症である事が判明した。この事実がこの事件の裁判を大きく揺るがした。未成年、そして精神異常。この二つの観点が考慮され、終ぞ大場は無罪を言い渡される結果となった。

「なるほど、それで俺に依頼してきたわけか。その大場を殺すために」

「はい……」

ベンチに座り、項垂れる新山勝次は力なくそう言った。勝次の座るベンチの後ろに歪は立っていた。「振り向くな」と言わなくても、勝次は振り向かなかつた。

もはや天誅、死神の正体など彼の眼中には無いようだった。殺害された小春の積年の思いを告げるのがやっとだった。

「貴方なら殺つてくれると聞きました。お金ならいくらでも払います」

「俺からすればあの裁判は茶番だ。そもそも加害者に7人の弁護士が付く事自体奇妙な話だ」

「私もそう思いました。そう思いながらもなんとか頑張つて戦つてきました。」

「ただ結局は法の壁に閉ざされ、大場は無罪に……私はね、悔しいんですよ」

歪は黙った。実は歪の隣に紅麗もいる事を勝次は知らない。

紅麗もこの裁判に興味を持っていたようで、単独で受けた依頼だったのだが「私も行く」と言つて聞かなかつたのだ。

「あの子は……小春はね、我々親が頑張つて頑張つて、ようやく

授かった娘なんです。

妻の美紀は体の構造上、なかなか妊娠し難い体質で、ほとほと困り果てていたんです」

歪は何も言わず勝次の話に耳を傾けた。

「ようやく授かった素晴らしい命……。しかも娘ですよ。可愛い娘だったんです。気の優しくて利発な娘です。

それを……。それをあの男は!!」

勝次の頬に大粒の涙が零れた。

「私たちはね、ずっと手塩にかけて大切に育ててきたんです。子供のためならなんでも出来る。目に入れても痛くないのが子供です。分かりますか？大事に育ててきた娘が突然目の前から居なくなってしまうんです。こんな辛い現実はありません。

それなのに、裁判はまるで加害者を守るような判決を下した。こんな事が……。こんな事が許されるなんて……」

「精神鑑定と言う現実が彼を生き長らえさせた……。と言うわけか」歪は静かに言った。

「はい……。だから貴方をお願いしたいんです。どうか、どうかあの男を……。大場を殺してください。

お金ならいくらでも払います。だからお願いです。妻の美紀はあの一件以来鬱病になってしまって……

お願いします……。お願いします……」

勝次の涙はその後も絶える事がなかった……。

「悲しいね。上手く言葉が出ないよ」

「残された遺族側の事を思えば、確かに悲しくもある」

アジトに戻ってきた歪と紅麗は重い空気のままそれぞれの時間を過ごした。

「他に何かあるの？」

微妙な言い方をした歪に紅麗が尋ねた。

「いや、これが加害者、被害者だけの問題なら悲しいの一言で済ま

されるだろう。

しかし、万が一そうでなかった場合、その悲しみは憤りに変わるだろう」

「どういうこと？」

「加害者側に死刑廃止運動に属している7人の弁護士が付いたと言っていたな」

「うん。ニュースでも取り上げられてた。前代未聞だって。それがどうかしたの？」

「ちよつと気になることがあつてな。これを見る」

歪はそう言つと封筒の中から数枚の書類を出し、テーブルの上に投げた。紅麗がそれを受け取る。

「それは今回の裁判に置ける審査内容の詳細を綴つた文面だ」

「ちよ、ちよつとどうしてこんなもの歪が持つてるの!？」

「いつもの事だ。裏ルートで入手した貴重なものだ」

歪がニヤリと笑つ。紅麗はその書類に目を通した。

「別に気になるところは無いと思うけど・・・」

「注目すべき点は裁判時の加害者の発言だ。良く見てみる」

「うん」

加害者の発言欄は書類の中央に記されていた。

裁判官の質問、そして弁護士の質問に答えている文章が載っている。そのほとんどは「はい」「いいえ」であり、素っ気無い感じが伺える。

「なんかそれだけかよ・・・みたいな感じがするね」

「ああ。だが注目すべき点はどこではない。加害者と弁護士のやり取りだけを掻い摘んで見てみる。おかしなことに気付くはずだ」

そう言われた紅麗は弁護士と加害者のやり取りだけを抜き取つて目を通した。

「あれ・・・全部はいで答えてるね」

「そつだ。おかしいだろ、いくら弁護士とは言え、加害者からしたらNOと答える質問だつて出てくるのが当然だ。」

だがこの法廷でのやり取りは見事にYesしかない」

「偶然つて事？」

「それはまず有り得ん。どうして加害者はYesとしか言わなかったか。一見するとお前の言うように偶然とも取れる。

しかし逆に考えるところも言える。加害者の選択肢はYesしか無かった・・・とな」

「あっ！」

紅麗は歪が言おうとしている事に気付いたらしい。

「どうやら何が真実か、それを先に突き止める必要があるそうだ」

2へ続く・・・。

END

## 第七話 「Guilty or Not Guilty」 27

「田宮弁護士、今回の無罪と言う判決についてどうお考えですか？」  
「正當な判断だったと思います。犯行当時、被告人は著しく精神を病んでおりましたし

後の精神鑑定で精神分裂病であることが確認されています。つまり犯行当時、大場被告には責任能力が無かった事を裏付けているのです」

「しかし被害者を殺害しただけでなく、バラバラにすると言う残忍な手段を取った被告人に、無罪とはどうなんだと世論は声を上げていますが」

「そのようですが、正直言つて私たち弁護士たちからすればどうだつて言い世論ですよ。我々の仕事は弁護ですから」

「田宮さんは死刑廃止運動の会に所属しており、以前からずっと死刑廃止を訴えていましたね」

「その通り、死刑など廃止するべきなのです。例え罪人が死刑になつても、殺された被害者は帰つて来ないので。

それならば加害者は生きてその罪を償い、真つ当に生きるべきだと、こう考えております」

弁護士の田宮は鼻高々だった。世間が注目する裁判で見事勝利を収めたのだ。

しかも自らが訴える死刑廃止を一步前進させると言う成果まで得られた。もはや感無量である。

裁判所の前で田宮はその饒舌振りを如何なく発揮した。報道関係者がごつた返す法廷前では凄まじい熱気が立ちこめている。

そんな賑やかな雰囲気とは別に、裁判所から離れた場所で新山勝次はポケットの中にあるナイフを握り締めた。

どうしても許せなかった。一番憎いのは犯人の大場だが、あのよう  
に被害者の遺族を侮辱するような発言を繰り返す弁護士も憎かった。

何が死刑廃止運動だ、こっちは愛娘を殺されて失意と悲しみのどん底にいますと言っのに。

あの男は自らの勝利を自らで祝福しているではないか。まるで加害者の勝利だと言わんばかりの態度だ。

勝次はポケットの中でナイフを鞘を外し、ゆっくりとナイフを取り出した。

「お待ちください」

「な・・・だ、誰だ！！」

ナイフがポケットから出る直前、勝次の背後で女の声が出た。

「ずいぶん物騒な物をお持ちですね」

勝次はハツとした。この女は自分が何をしようとしているのか分かっているらしい。

「あの弁護士を殺そうと言っんですね。だけど無駄です。そんな事をしてても貴方が捕まるだけです」

「そ、そうかも知れんが、もはや許せんのだ」

「我々が受けた仕事はあくまで加害者の大場を殺す事。貴方がやるうとしてる事は我々の仕事の妨げになるんです」

「・・・・・・・・」

「今日、指定した銀行から入金を確認しました。この時点で我々が仕事を請けることが決ったのです」

「だから・・・だからなんだと言っんだ」

「余計な真似はしないで欲しいのです」

「し、しかし!？」

「貴方のやるうとしてる事は犯罪。そんな事をして、小春さんが喜ぶと思いますか？」

「・・・・・・・・あなたは一体・・・」

「私は先日貴方が仕事の依頼をした男の仲間です。いろいろと調べてみたんですが、どうやらこの裁判には裏があるみたいなんです」

「な、なんだつて・・・」

「勿論、娘さんを殺害したのは大場です。それは間違いありません」

「そ、それじゃ一体何が・・・」

「それを現在調べています。ですがご安心ください。全ての真相を掴み、依頼を果たしたらまた詳しくお話します。

だからポケットの中にある物をしまってください」

「うう・・・」

勝次はそれに従うしかなかった。確かにこの女の通り、自分が罪を犯しても小春は帰って来ないし、喜ばないだろう。

「分かった」

「良かった。それじゃ、また」

そう言い残し、女の気配は消え去った・・・。

精神病棟に搬送された大場要は、まず最初に適切な検査を受け、その後隔離された病室へと向かった。

精神鑑定は既に終わっている。そのため搬送された今日、再び精神鑑定に掛けられる事は無い。

それは大場にとってホツと胸を撫で下ろす要因の一つだった。

先の法廷、あの時大場は何度心が狂いそうになったか分からない。

何度も声無き断末魔を上げ、苦しんだ。

精神鑑定など本当は望んでいなかったのだ。大場はあの少女を殺害した時点で死刑を望んでいた。

勿論死刑は怖かった。人を殺す事は出来ても、自分が死ぬ、ましてや殺されるなど考えたくはない。

人間は自分の都合の良いように解釈し、正当化してから過ちを省みる。

その過程において自分が死刑になることなどなかなか思い付かないものだ。人間はそれだけ傲慢で身勝手だ。

それは犯罪者、健常者関わらず人間全般に言えることだ。何も彼だけではない。

裁判が良い証拠だ。人間は良くないことが起こると、それを自分から遠ざけ、誰かのせいになければ気が済まない。

無論、罪を犯したのは大場自身なのだからそれは避けられないが  
法廷と言つ一種の法律によつて、犯罪は正当化され不当な事件には  
いち早く蓋をしたがる。

そのため犯人に異常が見つかり、精神異常と言つ名目を打ち出し、  
犯罪者を狂気に仕立てるのだ。

本来人を殺す事自体が異常と言える行為なのだ。そこに加害者の精  
神状態がどうか言うべきではない。

しかし現在の日本では「基本的人権の自由」と言つくだらない法が  
存在する事で凶悪な犯罪が多発する。

そしてその自由を逆手にとつた思想が罪無き人間を砕くのだ。

大場にとつてそんな日本の現実痛みを増殖させる種に過ぎなかつ  
た。

「ここがお前の部屋だ」

そう言つて通されたのは刑務所と同じような独房だった。唯一違つ  
のは窓があり光が差し込むと言つことだけだ。

観察員が出て行くと扉が閉まり静寂が訪れた。大場は頭を抱えなが  
らベッドに倒れ、深い溜息をついた。

「自分を偽る気分はどうだ？」

「えっ……」

突然聞いた事の無い声が響いた。大場は部屋を見渡したが誰もいな  
い。

「お前の犯した罪は重罪だ。許されない行為だが、許されない行為  
をしたのはお前だけではないな」

「だ、誰ですか……」

「胸が痛むんじゃないか？お前は死刑を望んでいた。裁判が正当に  
行なわれていたらお前は間違ひなく死刑だった。

しかしそこに邪魔が入った。その邪魔者のせいでお前は死刑を免れ  
た」

誰だか分からないが、この声の主は事の真相を知っている……ど

うして・・・？

「死ぬに死ねない気分はどうだ？」

「どうしてそんな事を聞くんですか！！」

「お前に死以上の苦痛を与えるためだ。誤りたくても誤れない。お前はそんな心境のままずっとここで生きるのだ」

「止める、何も言わないでくれ！！」

「辛いだろう。それが後悔、過ちと言うものだ。死を免れた事で生きる事は出来る。しかし記憶は消えんぞ」

「うつつ・・・」

大場は両耳を塞いだ。しかしそれでも男の声は響いた。

「後悔しているか？あの少女を殺した事を本当に悔いているか？」

「僕は・・・僕はただ仲良くしたかっただけなんだ・・・誰もいなくて寂しくて・・・誰かに分かってもらいたかった。最初は殺そうなんて思わなかったんだよ。ただ彼女が暴れだして、

どうしたら良いか分からなくて・・・ああ！！」

二度と思い出したくない記憶がフラッシュバックする。殺したときの体温と温もりがまだ両手に残っている。

「お前は有罪だ。本当なら死がお似合いだが・・・」

「うつつ・・・誰でも良い。出来るなら僕を殺してくれ！！もうイヤなんだ！これ以上の苦しみはもう・・・」

「死は安易な道だ。お前には死以上に地獄の苦しみを味わってもらおう。死刑にすべき人間は他にいる」

「だ、誰なんだ・・・その死刑にするべき人って・・・」

大場はそう言ったが、もはや男の声は返って来なかった。それが嫌な後味を残す。

「返事をしてくれ！！誰なんだ、誰の事なんだよ！！」

「死以上に辛いもの。それは事実を知らされないまま、犯した罪に死ぬまで悩まされる事だ」

歪の言い残した言葉は、大場には届いていなかった・・・。

3へ続く・・・。

END

## 第八話 「Guilty or Not Guilty」(3)

死刑廃止運動の会。その本部がある代官山の事務所では、電話が引つ切り無しに鳴り続けていた。

今回の裁判の結果を受けて、他の法律事務所や弁護士会の会。そして住民からの苦情が相次いだ。

中でも世論からの批判は凄まじいものだった。

「倒産しろ」「絶対許さないからな」「人間をなんだと思ってる」  
加害者の大場に無罪が下った翌日から、そんな内容のクレームが殺到。

その電話を受けるテレフォンレーターの女性アルバイト2人が次々と辞めて行った。

しかしそれでも会長の田宮は動じなかった。今はまだ世論からの批判が相次いでいるが

自分が死刑を回避させたと言う事実には抜かりは無い。今後彼に弁護を依頼する事件は増えるだろう。

特に殺人と言う重罪を犯した加害者からの仕事は右肩上がりです昇するだろう。それは確かだった。

会のメンバー、並びに今回の事件で弁護を務めた他の6人の弁護士たちも歓喜の声を上げている。

彼らは正当な裁判、そして正当な弁護の元で行なわれた今回の一件について

自分たちの正義が勝利したと心から思っている。無論、それが事実なら胸を張って喜ぶべき事だ。

しかし、事実は理想とは違う。偽りや嘘は星の数ほど存在しても、事実だけは一つしかない。

その事実は現実とは違い、甘いものではない。理想と現実はまったく別世界だと言うことを

田宮以外の弁護士たちは知り得てなかった。

「これで我々に対する評価も一気に上がりますな」  
今回の弁護に参加した一人の大内が田宮に言った。

「そうだな。これは我々の勝利だ。胸を張って喜ぼうじゃないか」

「おおお!!」

その場にいた他のメンバーたちが唸りを上げた。

「ささ、田宮さんも飲みましょう」

「いや、私はまだやる事があるので後にするよ」

そう言つて田宮は事務所の二階にある彼専用のオフィスへ向かった。彼にはまだやる事が残っている。そう、それは今回の裁判で使った証拠を隠滅すると言つて仕事だ。

あれがバレてしまつたら元も子もない。そう思うと田宮は足早になつた。

オフィスに入ると田宮は真つ先にデスクの引き出しに隠してあつた封筒を取り出した。

この中には今回の裁判に関する綿密な詳細が書かれた資料がいくつも納まつている。

これさえ抹消してしまえば証拠は全て隠滅した事になる。

不安要素は精神病院に搬送された大場が口を割らないかと言つて部分だが

大場には精神異常と言つ鑑定結果が下されている。そんな状況で万が一大場が喋つても

誰一人まともな扱いはしないだろう。何より精神病院とは言え彼の病室は隔離されているのだ。

封筒に開けられた痕跡は無い。封もちゃんと閉じられている。田宮は安堵の溜息を漏らした。

デスクに置かれている灰皿を手繰り寄せると、持っていたライターで封筒に火を付けた。

書類の入つた封筒は下から徐々に燃えて行く。半分くらいまで火が点いた所で彼は封筒から手を離れた。

「これで終わりだ」

「お前は腐れ外道と言っ言葉を知っているか？」

その時、突然男の声が響いた。

「なっ！だ、誰だ！！」

「腐れ外道とは道理に背く考え。また、その考えをもつ者。邪道。

その中でも最も腐ったクズと言っ意味だ」

「誰なんだ！？」

田宮は部屋中を見渡した。しかし誰もいない。

「腐れ外道・・・お前ほど似合う人間はいないな」

「一体誰だ！姿を見せろ」

「ここにいるぞ」

その瞬間、田宮の真後ろで声が響いた。田宮は瞬時に振り返る。

しかし男の姿を見た瞬間、田宮の意識は遠退いて行った。

次に田宮が目覚めたのは見たことも無い部屋だった。

どこかの廃屋だろうか。それとも工場？複雑な機械がそこら中に散乱していた。

「痛・・・」

田宮は椅子に座らされていた。しかし足を拘束されており身動きが取れない。

おまけに彼の両手首には注射器が刺さっており、その先端はチューブに繋がっている。

そしてそのチューブの先には大きなバケツが置かれており、そこへ血液が流れ落ちていた。

「これは・・・まさか・・・」

田宮の顔から血の気が引いた。

「お目覚めかね。天下の弁護士さん」

「き、貴様は！！」

田宮の目の前で一人の男がやはり椅子に座っていた。男は黒スーツを着ており、その上からブラックレザのロングコートを羽織って

いる。

頭にはウエスタンハットを被っており、表情は良く見えなかった。

「これは何の真似だ！」

「死の裁判だ。勿論、被告人はお前だ」

「な、なんだとっ！」

田宮は男を睨み付けた。男は右手に持っていた封筒から一枚の書類を取り出すと、それを静かに読み上げた。

「ずいぶん手の込んだ内容だな。私が尋ねる質問には全て「はい」と答える事」

「ま、まさか・・・」

「加害者を精神鑑定に持ち込むプロセス。それは大場本人を精神異常に見せかける事。以下の項目は精神鑑定の際

大場本人に答えさせる模範解答である。精神鑑定で異常と判断されればもはや勝利はこつちのもの・・・か」

「な、なぜそれを・・・」

「お前は中身を確認せずに書類を燃やした。甘かったな。事前に摩り替えておいた」

「な、なに・・・!？」

「お前は死刑廃止のために今回の事件を利用した。加害者の大場に無罪を与えるためにこうして策を練っていたわけだ」

「しょ、証拠は無いだろ！」

「あるさ。この書類にはお前の指紋がベッタリ付着しているからな」  
「うっ・・・」

「お前は裁判の直前に大場にこう言った。精神異常を装えば無罪になると。そんなに死刑は嫌いか？」

歪は嘲笑うようにそう言った。

「欲とは恐ろしいものだ。お前を見てるとそう思う」

「ふ、ふざけるな！死刑こそ愚直な判断！無くすべき行為なのだ」

「今のお前が言っても説得力が無い。大場は死刑を望んでいた。しかしお前は今回の事件を利用するために

大場に良からぬ事を吹き込み、無罪へと持って行った。これは列記とした邪道だ」

「お、お前には関係ないだろ！離せ！」

「あるんだよ、俺はある人間から大場を殺して欲しいと言う依頼を受けた」

「な、なに！」

「しかし蓋を開けてみたら、重罪はお前の方だった。大場も確かに重罪だ。しかし大場はもはや精神病院から出られない。

そう言う意味ではこの先有害とは言えない。しかしお前はどうか」

「くっ……」

「同じ重罪のお前は今後も暗躍を続ける。死刑廃止などと言う甘ったれた思想を持ちながら」

「くそっ！！俺は無罪だ、法を犯したわけじゃない！」

「犯してるさ。事実隠滅と言う加害者との凶暴。弁護士である事を盾にして、不当な裁判に仕立てた。有罪だ」

そう言うとき歪は手元にあったスイッチを押した。

「な、なんだ……」

しばらくすると田宮の両手に刺さっていた注射器の先端から血液が流れ始め、バケツの中に溜まって行った。

「こ、これは……」

「そうだ。その血液はお前の血。バケツが一杯になったとき、お前は死ぬ」

「なっ！」

そうしている間にも注射器から血液が抜かれていく。

「持って後5分だろう。お前の命も後5分で燃え尽きる」

「や、止める！」

田宮は激しく動き回った。しかし身動きが取れない以上どうにもならない。

歪は持っていた書類を部屋の片隅に置かれていたファックスに設置した。

「この書類は5分後に新聞社へファックスとして送られるようになってる。自動送信だ」

「止める！頼む、止めてくれ！！」

「お前にチャンスをやろう。もしお前が生きる道を選ぶのなら、手元にあるスイッチを押し、一連の事実を告白しろ」

田宮は手元を見た。そこにはテープレコーダーがセットされており、録音のスイッチがあつた。

しかしそれは自らを自滅に追い込む事になる。

「ファックスの自動送信は止められない。だが、お前が自らの犯した罪を悔い、告白すれば血液の機械は止まる。」

生きる事が出来るのだ。さあどうする？生きるか死ぬか、決断しろ」

「う、うわあああつ！！」

田宮の頭はパニックに陥つた。もはやどうすれば良いのか見当すら付かない。

「やめる・・・やめてくれ・・・ああああ・・・」

「惨めなもんだな」

有罪か無罪か。判決を下す決断のゲームが始まった・・・。

4へ続く・・・。

END

第九話 「Guilty or Not Guilty」 4

「ああああ……どうすれば良いんだ……」

田宮は呻き声のような嗚咽を上げた。

「うっう……」

目からは涙が流れ、鼻からは鼻水が流れる。そして心に広がる絶对的な恐怖。

「なんで……なんで私がこんな目に合うんだ!!くそっ!!」

田宮は仕掛けられている機械を壊そうと必至に暴れまわった。しかし金属の金具を破壊するだけの威力はない。

「くそっ、くそっ!!殺してやる!!殺してやるぞあ!!」

「ククク……とうとうバケの皮が剥がれたな」

「黙れ!!」

目の前にいるウエスタンハットの男は余裕だった。

「さて、残り三分弱。俺はこれで失礼するよ」

歪はそう言うつと椅子から立ち上がり、ドアノブに手を掛けた。

「ま、待て!待ってくれ!お願いだ、助けてくれ……あんたには関係ないだろう」

「殺してやるんじゃないのか?」

「じよ、冗談だよ。なあ、頼むよ。殺さないでくれ」

「丁重にお断りする」

そう言うつと歪はドアから外に出て、外側からドアに鍵を閉めた。

「ま、待て!!くそあ!!殺してやる!殺してやる!!」

コツコツコツと言う靴音は遠ざかり、そして聞こえなくなった。

「ああああ!!くそっ!!」

田宮はもがいた。しかしどうにもならない現状に変化は無い。

徐々に田宮の体から力が抜け始めた。目の前が遠くなり、脱力感が増殖する。

「ま、まずい……こ、このままじゃ……」

田宮は椅子に設置されているボタンを押した。それと同時にテープレコーダーが録音の状態に入る。

「い、一連の事件について、事の真相はその書類に書かれている通りだ。

そ、その罪は……償う所存であります……なので……ど……ど  
うか、御慈悲を……」

田宮は溜まらず告白をした。すると「カチ」と言う音が響き、両手に刺さっていた注射の針が離れた。

「こ……これで……う……動ける……」

田宮は鈍くなった身体をなんとか起こし、椅子から離れた。

「う……うわっ！」

しかし身体はもはや瀕死である。血液を失い過ぎたのだ。このままでは本当に死んでしまう。

一刻も早くファックスを破壊し、テープを回収してこの場から去らなければ……。

「はああ……はあ……はあ……はあ……」

目が窪み、口から涎が垂れた。それでも田宮はファックスの乗った机にしがみ付き、なんとか立ち上がった。

約束の5分までまだ時間がある。大丈夫だ、まだ間に合うさ。

「な……なんだこれは……」

ファックスに触れようと思った田宮の手は、ファックスを覆う何かに触れた。

それは強化ガラスだった。強固な強化ガラスの中にファックスが納まっている。

「じょ……冗談じゃ……ない……ぞ……」

田宮は手でそれを叩いた。しかし力が入らない。強化ガラスはビクともせず、制限時間を待っているようだった。

「なんで……なんでこんなに……力が入ら……ない……んだ……」

「……」  
バシバシと強化ガラスを叩くが、ガラスは動じない。

田宮は叩いた反応で体のバランスを崩し、その場に転倒してしまっ  
た。

「く……くそ……ん？これは……」

倒れた床に紙が落ちていているのに気が付いた。田宮は今にも消えそ  
うな命でそれを読んだ。

「そうそう、言い忘れていたが、血液を抜かれ始めて3分が経過す  
ると、全体の血液の3分の2が消費された事になる。

人間の身体は血液が3分の2以下に下がった場合、その後1分30  
秒以内に輸血しなければ助からない。健闘を祈る」

紙にはそう書かれていた。

「な……なんだと……ふ……ふ……ふざけ……やが……  
つて……」

田宮は自分の両手を見た。そこには注射器の針が抜かれた事によっ  
て開かれた穴からわずかな血が流れ出ていた。

制限時間まで、残り40秒。

「く……くそ……」

30……20……10……9……8……7……

「だ……だれ……か……」

6……5……4……

「た……た……すけ……て……」

3……2……1……

その瞬間、部屋には永久の静寂が流れ、同時に自動送信のファック  
スが起動した……。

「発見された遺体は、一連の事件で大場容疑者の弁護士を務めた田  
宮良一弁護士である事が判明しました」

「事件のあった部屋には、天誅、死神と書かれたメモが見つかって  
おり、またもや天誅死神事件へと発展した模様です」

「新聞各社に送られてきたファックスによりますと、今回の裁判で

は被告人と弁護士との裏取引が行なわれていた模様です」

「正当な裁判ではなかった事が明らかとなり、死刑廃止運動の会はこの事実を受けて解散する意向を発表」

「まさか裏で弁護士との不当なやり取りが行なわれているとは、一体誰が考えたでしょう」

「前代未聞の事件です。今回の事件は、まさに天誅、死神によって明らかとされた事件だったと言えるでしょう」

「最高裁判官は、この一報を受け、今後このような事が無いよう、厳重に注意して行きたいと述べています」

「弁護士協会を根底から揺るがす、歴史上類を見ない事件へと発展する見方を強めています」

「まさかあの弁護士がそんな事を……」

事の真相を聞いた勝次は驚愕した。

勝次は依頼したときと同じ場所にあるベンチに座って頂垂れた。

「お前が殺しを依頼したあの大場と言う男は、確かに死刑に値する罪を犯したが、あの弁護士よりはマシかも知れんぞ」

「えっ……」

「これを見る。これはあの弁護士の事務所で見つけた大場自身が書いた手紙だ。送り主は大場の家族になっているが

事件発生後、大場の家族は姿を消している。おそらく家族には届かなかったのだろう。それを田宮が隠し持っていた」

勝次は受け取った手紙を広げた。そこにはこう書かれていた。

「僕は自分の犯した罪がどれほど大きなものは分かっているつもりです。だから僕は死刑を望みます。

それだけの事をしたんです。死刑になって当然です。本当に後悔しています。出来る事ならあの子に誤りたい。

本当に悪かったと。本当に申し訳ないことをしたと、そう伝えたいです。

もし、万が一ですが死刑を免れたら、その時はこの罪を背負い、一

生謝罪していくつもりです。

本当にごめんなさい・・・本当にすみませんでした」  
そう書かれていた。

「あの男は・・・大場は死刑を望んでいたんですね」

「ああ。だがあの弁護士によつて精神鑑定に掛けられ、今は精神病院にいる」

「テレビのニュースで精神病院で大場は狂ったと言っていました」

「そのようだな。恐らく事実だろう。あの男にはあえて真相を話さずに置いた。苦しめるためにな」

「そうですね・・・」

「気が済んだか？本来の依頼とは別の人間を殺す事になったが、お前がどうしてもと言うのなら大場も殺すが」

「いえ、結構です。もう十分です。どんな事をして、もう小春は帰つて来ないのだから」

そう言うつと勝次は立ち上がった。

「いろいろとありがとうございました。事実が明らかになって、今後弁護士協会は変わつて行くでしょう」

勝次は振り返らずに言った。

「だと良いがな」

「それじゃ、失礼します」

そう言い残し、勝次は去つて行った。

歪は何も言わなかった。ただ立ち去る勝次の背中を見つめ、「不条理だな」と思うだけだった。

依頼は果たされ、事件は解決した。

その3日後、新山勝次は家の台所で首を吊り、自殺した・・・。  
遺書は見つからなかったと言う。

END

第十話 「新興宗教」(1)

「ぐはっ!!」

男は壁に叩きつけられ、力なく頂垂れた。呼吸は激しく乱れており、身体は至る所から血が流れている。

全身黒尽くめの男・・・それ以上の情報は得られていなかったが、組織の中で囁かれていた男はこの男だろう。

ブラックレザーのロングコート、頭にはウエスタンハット・・・間違いなかった。

「お前たちの目的は一体なんだ」

歪は自分の目の前で頂垂れる男を見下し、そう言った。

「日本で何をしようとしている」

「があっ・・・」

歪は頂垂れる男の首を掴み、軽々と持ち上げた。

なんと言ったことだ。30もいた仲間が全員殺されてしまった。一体この黒尽くめの男は何なんだ・・・。

「どうあつても喋らんようだな」

「お、お前には関係の無い・・・事だ」

「関係ある、無いは俺が決める事だ」

「よ、世直しのつもりか？天誅、死神・・・」

「ほう、俺を知っているのか」

「当然だ・・・お、お前は我々組織の中では・・・有名だからな」

「それは光栄だ。言え！お前たちの目的はなんだ」

「へへへ・・・例え知っていても・・・言うものか」

「そうか、なら死ね！」

「うっ・・・」

歪は男の首の骨をへし折った。男の口からは大量の血が流れ、やがて動かなくなった。

「連中の目的は何なんだ・・・」

歪は静かに呟いた。

その組織が裏社会で暗躍を始めたのは今から半年ほど前の事だった。最初は単なる麻薬売買の斡旋やブローカーとの取引が目立つ悪事を繰り返していたが

様々な情報を元に、詳しく調べてみるとかなり巨大な組織の存在があった。

現在日本で暗躍しているこの組織は小規模なもので、本体となる本部は東南アジアを拠点としている。

インドネシアや中国、ニュージーランドやオアフ島などに住を置き、裏社会で蠅のように飛び回っているらしい。

連中の組織名はまだ不明だが、各国の警察機関は既にその存在を認知しており、極秘に捜査が進められている。

それでも組織壊滅と言う言葉が上がらないのは、かなり巨大なマーケットを支配している証拠である。

彼らは各国のブラックマーケット、いわゆる「闇市場」を多数所有しており、定期的に開催しているようだ。

そのメインとなるがドラッグと人身売買、そして裏市場で取引される人間の臓器である。

連中はそれらを資金源としており、時間と共に組織は巨大化の一途を辿っている。

既にアメリカやスイス、カナダ、ロシアだけでなく、ヨーロッパ諸国にも進出しており

かなり広範囲に渡って活動の幅を広げていると言う情報もある。

日本ではまだ小規模の組織だが、現在でも神出鬼没でいくら組織の人間を叩こうとも口を割る者はいなかった。

ドラッグと人身売買、そして臓器。これらが彼らの資金源のようだが核となる本当の目的は未だ不明のままだった。

歪はこの組織に目を付けていた。別に仕事の依頼で動いているわけではない。事実無償の仕事だ。

かと言って正義の味方を気取っているわけでもない。歪に取っては  
何故か勘に障る連中なのだ。

群れて組織を巨大化させ、それで何かを得ようとする。正当な方法  
ならまだしも非合法である。

歪はそんな連中が気に触った。クズは一人じゃクズのままだが、そ  
れが徒党を組むとクズが組織になる。

組織は人を強靱にさせ、その分だけ凶悪になる。いずれにしても社  
会では有害な存在になる事は間違いなかった。

そして連中の取引が行なわれる事を知り、こうして乗り込んできた  
のだが結局収穫はほとんど無かった。

抹殺した30人全員が組織の事を語らずに死んだのだ。いや、殺し  
たのだ。

どれだけ痛めつけようと、口を割る者がいない。

それは組織全体にかなりの統率力があると言う証拠だった。寸での  
所まで追い詰めるのだが、毎回上手く逃げられてしまう。

唯一の収穫といえば、歪が組織に知られていると言う事だけだった。  
まあ良い。いずれ合間見える事になるはずだ。歪はそう思い、その  
場を後にした。

「紅麗ってどんな仕事してるんだっけ？」

「えっ・・・ああ、何でも屋って言うのかな。そこで働いてるよ」

（まさか殺人の手助けやってます・・・なんて言えないよね）

紅麗は久しぶりに会った友人の尻原なきはら 巴ともえにそう言った。

「何でも屋ってどんな仕事なの？」

「文字通り何でも受け持つの。それこそハウスクリーニングとか介  
護とか。でも最近は興信所みたいになってるけどね」

「へえ〜探偵とは違うんだ」

「うん、ちよつと違うんだけど、まあ似たような感じよ」

「そっか。ところで知ってる？真奈美たちの話」

「真奈美たちの？」

紅麗は高校時代の友人たちの名前を聞き、久しぶりに彼女たちの顔を思い出した。

「やっぱり知らなかったんだ」

「全然知らない。何かあったの？」

「うん、それがね。真奈美とか琴音たちってさ、家族関係でちょっと問題あったじゃない」

「うん、確か親が離婚しているとか、元々親がいないとか」

「そうそう。それで高校を卒業した後らしいんだけど、宗教に入ったらしいのね」

「宗教に？」

「うん、私もね言ったんだよ。宗教は止めなつて。でも聞かなくてさ。それで何処の宗教に入ったと思う？」

「さあ、想像も付かない」

「あの天誅会に入ったらしいのよ」

「て、天誅会にっ！！」

天誅会・・・文字通りズバリ「天誅、死神」を神と崇拝する新興宗教団体のことである。

天誅、死神、つまり歪の暗躍が社会に知れ渡り、悪事だけを壊滅させると言う行為が

健全者の間で熱狂的な信者を登場させ、出来上がった宗教の事だった。

天誅、死神を神と崇拝する人間はかなり多く、インターネット上でも一時期話題となった。

天誅会の事は歪も知っている。歪は「勝手にさせておけ」とほとんど気にしていない。

最近立ち上がったばかりの新興宗教なのだが、一部の情報によるとあまり良くない評判が飛び交っていた。

そのため通常の宗教を重んじる信者たちの間では「邪教」と言われ

ており、天誅会の信者たちは「邪教徒」と罵られている。

世論やメディアからの評判もすこぶる悪く、その存在はオウム心理教を上回るとまで言われていた。

「でもどうして天誅会に？」

「分からない。だけど天誅会に入った後、彼女たちかなり変わってしまったらしいの」

「変わったって？」

「なんだか凶暴になったとか言ってたっけね・・・可愛そうに、きつと洗脳されたんだわ」

「洗脳・・・」

紅麗の中で良からぬ鼓動が高鳴った。仮にも高校時代、苦楽を共にした中である。今でも彼女たちとの思い出は輝いていた。

高校を卒業した後すぐに歪と行動を共にするようになった紅麗にとつて

彼女たちと過した高校3年間は何物にも変えがたい素敵な思い出なのだ。

そんな輝く過去で共に生きた友たちが変わってしまった・・・。

しかもそこには宗教の影がある。

調べてみようか・・・紅麗の頭をそんな言葉が過ぎった。

「悲しいよね、いくら辛いからと言って宗教にハマるなんてさ」

「そうね。他に道は無かったのかな」

「無かったから入ったんでしょ、きつと」

「そっか・・・」

紅麗は何ともやり切れない気持ちだった。出来る事なら力になってやりたいが・・・。

「さて、気分転換にまた買い物に繰り出そうよ」

「そうね。欲しいものがあるんだ〜今日は買っぞ！」

「行くっ行っ」

「うん」

このやり取りが運命を狂わす事になる。  
しかし、この時の紅麗はそれに気付いていなかった……。

2へ続く……。

END

## 第十一話 「新興宗教」(2)

11月24日 成田空港

クリスマスを一カ月後に控えた空港には、既に聖夜を意識した装飾が施されている。

航空券売り場の近くには巨大なツリーが設置され、来月から電装のスイッチが入る事になっている。

空港内に住を構える店の窓にはトナカイを引き連れたサンタのイラストが書かれ

中にはスプレーで描かれたクリスマスの絵などもあった。

エアポートから空港内部を抜け、久しぶりに日本の空気を肌で感じた感想はやはり「寒い」だった。

無理も無い。昨年が暖冬だったせいで今年の冬は寒くなると言われているのだ。

気象庁からの発表でも「今年は例年に比べかなり寒くなるでしょう」と伝えている。

男は自らが吐く息の白さに感慨深いものを感じた。

「久しぶりの日本だ。5年ぶりか、速いもんだな」

誰に言うでもなく、男は伸びをしながら呟いた。この寒さでは今年には年内に雪が降るだろう。やはりコートは必需品だ。

カーキー色のコートを羽織り直した男は荷物を持ってタクシー乗り場へと急いだ。

タクシー乗り場に向かう途中、男は新聞を買った。日付は今日、時間的にまだ午前中のため朝刊だ。

すぐにタクシーに乗ろうかと、一瞬考えた結果、男は近くのベンチに腰を下ろした。

やる事はあるが別に急ぐ必要は無い。せつかく5年ぶりに降り立った日本の地だ。少しくらい時間を掛けてもバチは当たらない。

それに事は全て順調に進んでいる。今は丸腰、つまり何の武器も持

っていないが

既に武器の調達は済ませており、これから向かう先で手に入る事になっっている。

銃、弾薬、その他武器は何でも手に入る。ショットガンだろうとミサイルだろうとマシンガンだろうと手にする事は可能だ。

しかし男は刀に拘っていた。「俺が手にするのは刀と決めている」そんな言葉を何度も口にしてきた。

しかし凶器と共にフライトする事は出来ない。金属探知機で発見され、そのまま逮捕となってしまう。

そのため男は来日する前に既に愛刀とその他の武器を「密輸」と言う形で日本へ送っていた。

「密輸」・・・文字通りそれは違法行為であり許される事ではない。しかし中国の裏社会で一時は頂点を極め、チャイニーズマフィアを手中に収めていた彼にとつて、密輸など朝飯前なのだ。

これから始まる一大戦争に比べたら、密輸など動作も無い事だった。男は新聞を開き、視線を下へと移した。瑞々しい黒髪は目の下辺りでまとまっており、質はストレート。

常に穿いているレザーのズボンは年が入っており、彼のお気に入りだ。

左耳にはドラゴンの爪を象ったプラチナのピアスをしており、胸には同じくプラチナで出来たロザリオのネックレスが光っている。

目鼻立ちのハッキリした顔付きは若干童顔で、実年齢よりも若く見られることが多い。

「天誅、死神・・・大活躍だな」

男は新聞の一面に記載されている記事を読んだ。ここ日本では「天誅事件」と称されている。

記事にはまたもや天誅、死神の事件が発生した事を伝えており、「闇の救世主か!？」と銘打たれていた。

その隣には「天誅会」と書かれた宗教団体の記事が載っていた。教祖と思われる男が威風堂々と演説している写真だ。

「天誅、死神に天誅会か・・・意外と早い再会になりそうだ」  
そう言くと男はタクシー乗り場へ向かった・・・。

紅麗が目を覚ました時には既に歪は出掛けていた。

どうやら例の麻薬組織についていろいろと調べまわっているらしい。  
最後に歪と会ったのが2日前になる。

深夜、アジトには戻って来ているようだったが、朝になるとすぐに  
出掛けてしまう。

こういうパターンは以前にも何度かあった。酷い時は1週間顔を合  
わさないときもあったくらいだ。

そのためこういう自体には既に慣れっこだった。もし何かあった場  
合いは連絡すればすぐに会える。

だから今回の事件・・・と紅麗が勝手に決めている「天誅会」の  
事も、連絡さえすれば歪の手を借りる事は可能だった。

だが紅麗はあえて歪には連絡しなかった。今回の一件は紅麗が個人  
的に興味を持っている件であり仕事ではない。

まして首を突っ込んだ理由が「学生時代の友人たちを救うため」と  
あつては、人の力を借りる事は躊躇われた。

それに紅麗には「自分でもやれるんだ」と言う事を歪に見て欲しい  
と言う気持ちも強かった。

自分はいつもアシスタントパートナーであり、事実上の実行犯では  
ない。

建物に侵入する際の分析と回路の割り出し、その他頭腦的な仕事を  
受け持つのが紅麗の役目である。

そのためいつも歪と言う絶対的な人間の背後にいる。それではいつ  
まで経つてもこの裏社会では生きて行けない。

この世界で生きてゆくため・・・そして何より歪に認められたいと  
言う気持ちは大きかった。

女として見て欲しい、本当はそう思っている。だがそれを歪に求め

るのは間違っている。

この世界は表のリアル世界とは違うのだ。いつでも犯罪が起こり、いつでも争いが起こる世界。

そんな世界で好きだの嫌いだの言っていたのでは、とても生き残れない。

それに歪はそういう人間ではなのだ。恋愛感情は彼に取っては生温い感情であり、必要の無い感情。

歪は依頼さえあれば、依頼主の恋人や家族でさえ笑って惨殺する男。そこに愛があるのと無かろうと、己の貫く己だけの正義に従う人間なのだ。調和や協調、協力と言った言葉は歪には無い。

そんな事は紅麗も分かっている。分かっているが故に認めて欲しいと言う気持ちを抱くのだろう。

そこで紅麗が下した決断。それが「潜入捜査」だった。

昨日、友人の巴から聞いた情報を元に、最近天誅会に入団した人々の詳細を調べてみた。

その結果、巴が言ったとおり、高校時代の友人である木下きのした 真奈美まなみと大塚おおつか 琴音ことねが

二人揃って同じ日に入会している事実が明らかになった。

更に独自の調査を進めたところ、天誅会から退会した人の中に、体調不良や何かの中毒症状を訴える人々が続出している事を突き止めた。

皆一様に「退会してからおかしくなった」と話しており、「死神のあたり」や「死の宣告」などと

本気で神の存在を信じ、それに背いた自分たちへの報いだと話す人々がいると言う。

紅麗は彼らたちの症状は入会当時に何らかの形であったはずだと判断した。

おそらく退会した事がきっかけとなり、それが一気に悪化したのではないか？紅麗はそう考えていたのだ。

となると入会したかつての同僚たち、真奈美と琴音もそれに犯され

ている、あるいは危機に直面している可能性が極め強い。それにもし紅麗が推測した事実が本当なら、このまま天誅会を放っておくわけには行かない。

自分が潜入する事で何らかの事実を突き止めれば、それを公にする事が出来る。

「天誅、死神」つまりは歪を神だと崇拜する宗教。本当の天誅、死神を知っている紅麗にとって

天誅会など、もはやニセモノにしかなれない宗教だった。

今日はその天誅会の新規介入メンバーに対する歓迎会が行なわれる。紅麗はそれに参加する事になっている。当然費用も掛かったが今回は独自の捜査なので自腹だ。

かつての友を取り戻す事。そして天誅会の素性を暴く事。それが目的だ。

紅麗は余所行きのスーツに身を包むと、歓迎会の会場へと向かった。  
・  
・  
・

3へ続く・・・。

END

## 第十二話 「新興宗教」(3)

「天誅会に入会するという事は、単に救いを得られると言うことだけではなく

人間本来の本質を見直すと言う時間を得ると言うことです。天誅、死神様は世の中の悪事を絶つために

日々あらゆる悪事と向かい合い、そしてそれを排除しているのです。天誅会の教祖「ザスター」が何か言葉を発するたびに、会場には大きな拍手が巻き起こった。

「悪事はいずれ絶たれると言うことです。だから皆さんも悪事を働かぬよう、心がけ、そして生きていく事が大切な事なのです」

「死神様、万歳！」

「死神様に光あれ！」

教祖のザスターもそうだが、紅麗はこの異様な雰囲気にもまれていくだけで気分が悪くなった。

紅麗は本来神など信じていない。信仰にはまったく興味が無かった。

「ザスター教祖に栄光を！」

「ザスター教祖に栄光を！」

教祖のザスターはもはや神だった。信者たちはザスターの教えを信じ、そして崇拜している。

本来崇拜するはずの天誅、死神よりもウエイトは大きいようだった。

「紅麗！」

「真奈美、琴音！」

歓迎会が終わった後のパーティ会場で、紅麗はかつての旧友、真奈美と琴音に再会した。

「紅麗も入ったのね」

「う、うん。まあね」

「どう？楽しんでる？」

「今日からだからまだちょっと緊張してるよ」

「そのうち慣れるわ。天誅会は最高よ」

真奈美と琴音が交互に話した。

なるほど、巴の言っていた事はあながち間違っただけではなかった。

真奈美も琴音も何処か艶っぽくなっている。学生時代はあれだけ地味な雰囲気を持っていた彼女たちが

突如として妖艶な雰囲気に変わる事など、通常は考えられない。

外見的な妖艶さを纏う事は出来ても、人間本来の本質まではそう変わるものではない。

二人はその本質までもが変わってしまった。それは女ならではの紅麗の直感がそう語っていた。

「貴方ですね、新しく我が会に入会されたのは」

「えっ……」

突然話しかけられ驚いた紅麗の後ろに、教祖のザスターが立っていた。

「ザスター様」

「ザスター様」

真奈美と琴音は自らの前で十字を切り、ザスターの前に跪いた。

「お名前をお聞かせいただいても宜しいでしょうか？」

「夜美也 紅麗と言います」

「紅麗さん……実に美しくお綺麗な名前だ。美しい方は名前までも美しいのですね」

歯が浮きそうだった……。イマドキこんなセリフを吐く若者は居ない。

紅麗は首筋が痒くなりそうだったが、どうにかそれを抑えた。

「我が会の方針はお聞きになりましたか？」

「い、いえ……まだなんです」

「そうですね、ではこちらをどうぞ」

ザスターはそう言つと小さなパンフレットを取り出し、それを丁寧に紅麗へと差し出した。

「全てそちらに書かれています。貴方も今日から天誅会の一員です。」

我が同士ですよ」

「は、はい」

「それではパーティをお楽しみください。また近い内お会いするでしょう。失礼します」

そう言うとザスターは去って行った。

「光栄な事よ。ザスター様のほうから話しかけてくるなんて」

「そうなの？」

「ええ。凄い事だわ。紅麗気に入られたのよ」

ありがた迷惑だ。そう思ったが紅麗は口にしなかった。

「そうだ。施設内はまだ見て無いわよね」

「うん。なんせ今日からだから」

「だったら案内するわ」

「行きましょう」

半ば強引に紅麗は真奈美と琴音に連れられ、施設内へと向かった。

「どうして二人は天誅会に入ったの？」

紅麗は確信となる部分を率直に聞いてみた。どんな反応を示すか気になったのだ。

「救いが必要だったからよ。天誅会に入る前は絶望だったから」

「私も同じ。生きる事に迷っててね・・・でも天誅会に入ったら道が開けたわ」

「貴方もきつと心底美しく慣れるわよ」

「そうよ。自分以外の存在が全部醜く見えるほどにね」

二人の言動は明らかに妙だった。いくら高校卒業から3年が経っているとは言え、こんな事を言う人間ではなかった。

それに二人の目はやたらとギラついている。これは幸福感を内側から感じているときに滲み出る

人間の輝きではない。明らかに人為的に施された輝きに見える。

二人が案内した施設は手入れが行き届いており、とても清潔だった。礼拝堂から寝泊りの出来る施設まである。入会しているのがほとん

ど女性である事から  
女性信者専用のマンションまであるのだ。ずいぶんと金の込んでい  
る団体である。

夕方になると再び会場にザスターが現れ、祝賀会を収める言葉を残  
した。

信者たちはその一言一言を胸に秘めるような仕草でザスターを見て  
いる。

どの目も潤んでおり、心から陶醉している様子が伺えた。

パーティが終わると、紅麗は別室へと通された。そこには真奈美と  
琴音がいた。

「お疲れ様、座って」

「何をするの？」

「別に何かするって分けじゃないわ。新しく入会した人には2、3  
質問があるのよ。私たちはそれを担当しているの」

「そうなんだ」

「うん、だから座って」

「うん」

テーブルの上には綺麗な色をした緑茶が綺麗なグラスに注がれてい  
た。

「どうだった？天誅会のパーティは」

「え、ああ・・・とても良かったよ」

紅麗は苦笑いを作った。

「いろいろと歩き回って疲れたんじゃない？」

「そうね。歩いたり喋ったりしたから、ちょっと疲れたかな」

「お茶もあるからここからはまったりと行きましょう」

「そうだね」

そう言つと紅麗は目の前にあるお茶を口に含んだ。しかし口に含ん  
だ瞬間、奇妙な違和感を感じた。

それは以前、歪が言っていた味とまったく同じ味だった。

「これって緑茶？なんだか妙な味がするね」

「ああ、それは高級品なのよ」

「そ、そうなん・・・だ・・・」

紅麗の意識は徐々に薄れる。

「ええ、そうなのよ。もう少しで貴方も楽になれるわ・・・」

次の瞬間、紅麗の意識は途切れた・・・。

4へ続く・・・。

END

### 第十三話 「新興宗教」(4)

「そう言えば304号室の患者さん、最近ご家族の姿見なくなつたわよね」

「ああ、なんか見放されたとか言う噂が流れてるのよ」

「ええっ！そんなの？」

「うん、最初は可愛そうだとか言っただけで面会に来ていたけど、親族の間で不幸があつたらしいのね」

「うん、うん」

「それから家族の間で溝のようなものが出来たみたいなの。彼女は関係ないのよね」

「それってもしかして遺産相続とか？」

「ピンポン。遺産を相続するに当たっていると事情があつたみたい。もう彼女の面倒は見れないとか言つてた」

「酷い親よね、最低だわ」

「同感。治療費だけはちゃんと払っているみたいだけど、お見舞いにはもう来ないらしいよ」

噂好きの看護婦たちはそんなやり取りをしながら歪の横を去つて行った。

歪の風貌は一見すると目立つ。何せ全身真っ黒なのだから。おまけにウエスタンハットを被っているせいで顔の表情も見えない。

そのため不審者に見えなくも無いが、天誅、死神の風貌を知らない世間では

例え仕事のとときと同じ風貌でも、自分が天誅、死神であると疑われる事はなかった。

歪と病院・・・それはあまりにも釣り合いの取れない両者だったが、今日はこの病院に用があつた。

歪はあれからずっと麻薬組織を追っている。一応アジトには戻って

いるが紅麗には会っていない。

彼がアジトに戻るのには明け方だ。既に紅麗は寝ている。そのためここ2日ほど彼女とは会っていないかった。

とは言え紅麗が何をしているかは知っている。紅麗は恐らく歪は何も知らないだろうと思っっているだろう。

しかし歪は紅麗が「天誅会」に関して探りを入れている事を知っていた。

高校時代の友人が天誅会に入会した事をきっかけに、彼女たちが変化したと言う話を別の方面で情報を得ていたのだ。

「止めておけ」と言おうと思っただが思い留まった。どちらにせよ自分ではどうしようもなくなつて連絡をしてくるだろうと

歪はそう踏んだのだが、昨日から何の連絡も無かった。おまけに昨日は戻っていない様子だった。

やれやれと言つた思ひは拭い取れない。大方自分でもやれるんだと言う事を証明したかつたのだろう。

彼女が考えそうな事だ。だがそんな紅麗の気持ちは、いつもそれをカバーする歪に取っては溜息が出るほどの厄介な事だ。

「いつも面倒ばかり掛けやがる……」

歪は一人そうごねたが言っついても仕方が無い。いつもの事なのだ。張り切つて飛び出したは良いが、いつも何かが抜けており途中で躓く。それが紅麗だ。

最終的には歪によって難を逃れている。今回もそうなるだろう。歪はすぐにも動くつもりだった。

しかしその前にやつて置く事があつた。その目的の人物がこの病院に入院しているのだ。

彼女の名前は涼風 すずかぜ 杏里 あんり

2ヶ月ほど前まで、彼女は歪が追っている麻薬組織のメンバーだった。

メンバーとは言え幹部クラスの重役ではなく、組織拡大の斡旋に伴

う窓口を務めていた。

彼女が組織に加わったのは今から3年ほど前になる。

歪の掴んだ情報に寄れば彼女はエスカレートする組織の方針に疑問を抱き、組織からの脱会を決心した。

だが組織内の幹部たちはそれを善しとせず、彼女に暗殺者を仕向けたのだ。

無論、暗殺者の手から逃れられるはずも無く、彼女はすぐに捕まった。

そこで彼女は記憶を抹消する薬物を投与され、更に視力を奪われて廃人寸前となってしまった。

組織が彼女を殺さなかった理由は明らかになっていないが、何かしらの理由があったはずだと歪は見ている。

薬物を投与され、光を失った彼女は東京の郊外を彷徨っているときに地元の警察によって保護された。

これがきっかけとなり、麻薬組織の存在が日本でも明るみになったのだ。

警察では現在この組織を追っているとの事だったが、「組織壊滅」の言葉を聞かない以上、捜査に進展はないのだろう。

彼女は現在、この病院の精神病棟にある個室で入院している。

彼女に会えば組織について何らかの情報が掴めるかも知れない。そう考えやって来たのだ。

「ずいぶん肩入れするんだね、この組織に」

階段を歩き始めた歪の頭の中に、先日紅麗から言われた言葉が反芻した。

傍から見れば肩入れしているように見えるのだろう。いや、事実確かに力は入っている。

歪はそれが可笑しくて口元が緩んだ。歪が麻薬組織を付け狙うには理由があった。

歪は日本人だが生まれた場所はベトナムだった。

何故ベトナムで生まれたかについては歪自身知らない。何故なら歪の親はとつくに死んでいるからだ。

察するに恐らく父親の仕事の関係上ベトナムにいたのだろうと推測している。

当時ベトナムは異なる宗教同士の争いが絶えず、毎日のように内乱が続いていた。

兵士たちは昼夜問わず戦うことを強いられ精神状態はまさに極限だった。

敵の兵士たちは昼夜、どの時間帯に攻めて来るか分からない。どの時間帯にも対応できるように時間差で兵士たちを配備させたがそれには限りがある。当時のベトナムは貧困から戦争ではなく、餓死によつて命を落す兵士が大勢いたのだ。

日に日に数を増す飢えによる死。もはやこのままでは戦いに勝てないと判断したベトナム宗教勢は金字塔に打つて出たのだ。

それが「シャイニングスター」と呼ばれる薬物の投与だった。

シャイニングスター、文字通り輝き続けるスター。これを摂取すると脳内にあるアドレナリンとグルタミンが過剰に上昇し

常に身体を興奮状態に維持する事が出来ると言う薬物だった。つまり寝なくても平気な身体になるのだ。

おまけにアドレナリンの異常な上昇によつて筋力は3倍にも膨れ上がり、動きも俊敏になる。

敵軍に勝つ事だけが正義だと勘違いした宗教勢は悪魔に魂を売った。宗教勢は次々とシャイニングスターを投与され、「戦う狂戦士」となつて行つた。

症状は人によつて異なるが、中には敵味方の区別が付かなくなる者も出た。これによつてベトナムの戦地は血塗れの戦いを回避する事は出来ず

とうとう当時のベトナム軍事政府まで制圧してしまつたのである。

歪の両親はシャイニングスターの犠牲となった。歪の前の前でシャイニングスターを投与された両親は

まるで獣のように雄叫びを上げ、敵が死ぬまで攻撃を止めなかった。これによってまだ少年だった歪の心はもはや崩壊した。

更に悪い事は続き、シャイニングスターの効果が切れたときの症状がまさに地獄絵図だった。

名前は横文字でも薬物は薬物。効果が切れれば待っているのは禁断症状のみである。

歪の両親は狂った。禁断症状で激しい幻覚を見、行動が狂乱へと変わって行った。

手が付けられないと判断した宗教勢はシャイニングスターを投与した人々を次々と銃殺して行ったのだ。

歪の両親もその犠牲となった。歪の目の前で頭をぶち抜かれ、辺り一面に粉々になった脳味噌が散らばる。

見開かれた眼光からは銃殺による衝撃で眼球が飛び出ており。口からはだらりと舌が垂れる。

歪は宗教勢の人々から死体を片付けると命じられた。「お前は狂戦士の子供、忌み子だ」と罵られ

無数に転がる死体をひたすら処理し続けた。焼却炉で燃やすと言う手段だったが

焼却炉の入り口は狭く、とても人間が入る大きさではない。焼却炉に放り込むためには

死体をバラバラに刻むしかなかった。首を切断し、手足を掻っ切る。それでも入らない部分は更に切断する。

歪は両親の死体は勿論、100体以上ある死体全てを切り刻み、焼却炉に放った。

その時、少年だった歪の心に鬼が宿った。悪があるからいけない。悪こそ全ての邪悪。

憎むべきは悪を操る人間。憎むべきは罪ではない、人間なのだ。。。

歪は階段を上がりながら小さく頭を振った。久しぶりに思い出した

記憶はやはり嫌なものである。

涼風杏里のいる病室の前まで来ると、中で誰かが喋っているのが聞こえてきた。どうやら担当の医師のようである。

しばらくすると医師たちが部屋から出てきた。歪は廊下の影に身を隠し、医師たちが去るのを待った。

病室のドアは開いたままになっていた。閉め忘れたのではなく、わざと開けられているようだった。

歪は気配を消し、足音を建てずに病室へ入った。

涼風杏里はベッドの上で座り、本を読んでいる。読んでいる本は「罪と罰」有名な書物だ。

歪は物音一つ立てずに部屋の脇にある壁にもたれ掛かった。

涼風杏里は想像していた以上に落ち着きのある女だった。瑞々しい黒いロングヘアーに凹凸のある目鼻立ち。

両目には包帯が巻かれており、患者専用の入院服を着ている。ほっそりとした指は古風な雰囲気を感じさせる。

しなやかに伸びた両足を斜めに折り、その佇まいは上品そのものだった。

杏里は静かに本を閉じると、そのままの体制で歪のいる方角へと頭を動かした。

見えるはずが無い。彼女は光を失っている。おまけに歪は気配も消しているのだ。

「こんにちは」

驚いた事に杏里は笑顔でそう言った。顔は歪の方を向いている。

歪は驚きの余り言葉を失った。何故分かる……。

「どなたですか？一度もお会いになった事の無い方ですよね」

歪は黙った。しばらく様子を見ようと判断した。

「見えるはずが無い……そう思っているのですね。確かに私は見えません。でもそのおかげで心の目が開いたんです。

試しに貴方がどんな方なのか、当てて見ましようか？」

これにも歪は答えなかった。彼女が自分をどう言い当てるのか興味

があつたからだ。

「男性の方ですね。身長は180はあるんじゃないかな。黒系の服を着てます。頭には・・・帽子を被ってませんか？」

「驚いたな。何故分かるんだ」

歪はようやく口を開いた。

「光が存在するのは何も目だけでは無いんです。心にも光は宿るんです」

杏里はニツコリと微笑みながらそう言った・・・。

5へ続く・・・。

END

第十四話 「新興宗教」(5)

「光は心にも宿る・・・か。さすが言うことが違うな」

「私も目を失って気付いたんです。それまではただ悲しいだけでした」

「悲しみは時間と共に薄れてゆくものだ。お前はその時間が人よりも短かったのだろうか」

「そうだと思います。ところで、貴方は？」

「その質問に答える前に、聞きたいことがある」

「为什么呢」

「俺はとある組織を追っている。いろいろと単独で調べているんだが、その先に行き付いたのがお前だった。

記憶と視界を消されたと聞いているが、何か覚えている事は無いかな？」

「組織・・・心螺旋の事ですね」

「心螺旋？それが組織の名前なのか？」

「そうだと思います。私も記憶を消されてしまったので明確には覚えてません。だけどその言葉は今でも残っているんです」

歪にとつてそれは有力な手掛かりだった。組織の名前は「心螺旋」

(しんらせん)それだけでも大きな収穫だ。

「その心螺旋はどうしてお前を殺さなかったんだ？聞けばお前は組織の一員だったそうだな」

「はい。いろいろと事をしていたと思うんです。これも覚えていないので良く分からないのですが・・・」

「お前が覚えている範囲の事を聞きたい。話してくれないか？」

「良いですよ、覚えている限りでよければ・・・」

そう言うと杏里は静かに語り始めた。

「心螺旋は元々は小さな組織だったんです。最初は売春の斡旋やブローカーとの闇取引などをメインに起こっていたグループで

まだ組織と呼べるほどの勢力は無かったです。でもそれが時間と共に巨大化して行って、気が付くと心螺旋と言う名前が出来上がり創設者や幹部を名乗る人々が増え始めたんです。私の覚えている限りでは、当時の私は詳しい事は何も知らされておらず

ただ運ばれてくる人たちを指定された施設に運ぶと言う作業を繰り返してました。当然私は医療関係だろうと思っていたんですがどうやら違ったようです」

「違った？」

「はい。これも私の覚えている範囲なのですが、私が運んでいた人々は皆既に死んでいる人間だったらしいのです」

「死んでいる人間……」

「一部の話では遺体から皮膚や臓器などを取り出して、それを何かに使うと聞きました」

「それは闇市場での臓器売買とは違うのか？」

「違うみたいです。私の知っている限り、それらを売ったと言う話は聞いたことがありません。」

それに彼らが摘出していたのは何も皮膚や臓器だけじゃないんです。脳や眼球、爪なども摘出してたと聞いてます」

「どう言う事だ……歪は疑問に思った。単なる麻薬組織ではないのか……。」

通常の麻薬組織であれば摘出した臓器はブラックマーケットで売られ、それを資金源として麻薬の取引に役立てるはずだ。

人間の皮膚や臓器と言うのはかなり高値で取引される。どんなに安くても300万円はくだらないと聞く。

臓器の種類によっても異なるが、通常なら1000万円レベルで取引される代物である。

それを売買せずにいるとは一体どう言うことなのだろう……。

「麻薬とは関係無さそうな事ばかりしているんだな」

「さあ、その辺は私にも分からないんです。私が心螺旋で働いていたのは半年だけでしたから」

「もう一つ質問に答えてくれ。何故自分は殺されなかったと思う？」「分かりません。私もあの時、暗殺者がやってきたときは殺されるだろうと思っただんですが……」

「何故か記憶と光を失うだけで済んだ」

「そうなんです。でも……」

「なんだ？」

「実は私にはちょっとした能力があるんです」

「能力？」

「大したことじゃないんですけど、私は光を失って、心に光が宿ってから、邪なものが見えるようになったんです」

「邪なもの？」

「はい。例えばそれが邪悪なものかどうか、それに近づいただけで何となく分かるんです」

心の目、心眼と呼ばれるものの悟りを開いた者だけが得られる一種の特技だろう。障害者が健常者よりも長けた部分があるのと同じだ。「心螺旋がどうしてお前を殺さなかったのか、何かわけがありそうだな」

「どうでしょうね。私には分かりませんが」

「もう一つ聞きたい。覚えている限りで良い、心螺旋は今何処に拠点を置いている？」

「心螺旋は時の流れによって拠点を変えています。アメリカだったり中国だったり。だけど私が暗殺者に捕まったとき

一人の男が妙な事を言っていたんです」

「なんだ？」

「ザスターが日本へ向かった。これで日本でも大きな市場が開かれるだろう」

「なにっ！！」

ザスター……この名前には聞き覚えがある。そうだ、天誅会の教祖の名前が確か「ザスター」だった。

ザスターは天誅会を設立した。そしてその設立させた施設には今、

紅麗がいる！！

さすがに歪は驚いた。まさか心螺旋と天誅会が繋がっているとは、考えもしなかったのだ。

「貴方に危機が迫っています」

「俺に？」

「正確に言うと貴方ではなく、貴方の良き理解者です。女性が見えますね、何かの宗教でしょうか。大きな施設が見えます」

これが杏里の言う特殊能力なのだろうか。良き理解者の女性とは間違いなく紅麗の事だろう。

「急用が出来た。失礼する」

「あつ！行く前にお名前を。貴方にはまた会うような気がするんです」

「天誅、死神」

「えっ！！」

次の瞬間、杏里の部屋から男の気配は完全に消え去った。

「天誅、死神・・・あの天誅事件の首謀者が私のところに・・・」  
杏里は思い出した。かつて心螺旋にいた頃、幹部の人間たちが口々に言っていた言葉。

「天誅、死神。いずれ我々の驚異となる相手だろう」

杏里は確信した。いずれまた天誅、死神と会うときが来ると・・・。

6へ続く・・・。

END

## 第十五話 「新興宗教」(6)

「あああ・・・ザスター様・・・もつと・・・」  
下半身を突き上げられる感触はいつもと違う。と言うよりも本来違  
つてならないと言えるだろう。

真奈美と琴音は快樂の絶頂へと引きずり込まれた。

媚薬を投与され、その上薬物を摂取した二人の肉体は一時的に感度  
が上がる。

その上肌の張りや細かな色素が向上し、その興奮は眼光にも現れる。  
妖艶とも取れる潤んだ眼球は淫靡な視線を向けるに相応しく

また同時に彼女たちがハマってしまった罠でもあった。

事が済むとザスターは起き上がり、ズボンのベルトを締めた。満足  
げな笑みを浮かべ、真奈美と琴音を見ている。

しばらくすると部屋中を見渡し、そして誇らしげに顎を擦った。

部屋には麻薬と媚薬の両方を摂取された女たちが、別の男性信者と  
共に腰を振っている。

あまりにも淫らな光景だが、これも組織存続と拡大を図るための実  
験なのだ。

薬物を摂取された信者たちは皆虚ろな目を浮かべ、まるで自分では  
無い獣のような雄叫びを上げる。

今のところテストに合格したのは数人程度。他の連中はテスト中に  
異変を訴え狂って行く。

その狂いもザスターを始め、組織の下っ端どもが鎮静剤を打つこと  
で難を逃れる。

今回ザスターが心螺旋から命令された実験は新型の媚薬と薬物との  
融合だった。

腕から摂取した媚薬と麻薬は人間の中枢神経を破壊し、感覚を麻痺  
させる。

その代わり脳内にある感觸を司る意識を向上させ、肉体の感度を上

げると言う役目を果たしている。

そこに同時に摂取した薬物が更に刺激を高め、肉体の衰えを完全に麻痺させる。

簡単に言ってしまうえば快樂を増殖させ、痛みを感じない体にしてしまふのだ。

「それにしても幹部は何故このような実験を……」

詳しい事は教祖のザスターですら聞かされていなかった。

部屋の奥には実験を待つ信者たちが椅子に座らされている。紅麗は後ろから4番目に座っていた。

「ザスター様、彼女は私たちの友人です。きつとご期待に沿えるでしょう」

「それは楽しみだ」

今回のテストに合格した真奈美と琴音がぐったりと頂垂れる紅麗を見ながらそう言った……。

どんなに急いでも天誅会の本部がある施設までは30分は掛かってしまう。

涼風杏里と別れた歪は様々な天誅会の本部へと急いだ。

心螺旋と天誅会がまさか繋がっていようとは考えもしなかった。

考えが甘かった……歪は少しばかりの油断に後悔した。

紅麗には日頃から万が一に備えての心得は教えてある。拳銃も持たせてあるし、様々なトラップを見破る術も知っているはずだ。

しかし、そんな日頃の備えが実行に移された事は今まで一度も無い。あの小さな身体で狂った信者たちを相手に出来るとも思えない。

彼女の性格を考えると持つて20分である。

「くそっ！こんな事なら先に連絡しておくべきだった」

飛ぶが如く、歪は天誅会へと急いだ……。

「なるほど。確かに上物だな」

ぐったりと頂垂れる紅麗の肉体を見て、ザスターは唸り声を上げた。身体は真奈美や琴音と比べると小さい。だが体の質感は二人よりも優れており、筋力も備わっている。

おまけに筋肉の質が他の女と比べて引き締まっている。これは日々ジムなどで鍛えている証拠である。

更に彼女の体内に巡る血液や女性ホルモンの巡回も申し分なかった。特に精神や脳波を司る女性ホルモンの量が多くなっている。これは恋をしている女に良く見られる傾向だった。

それによって本来以上の肌の質感や張り、優れた肉体の支持に貢献しているであろう。

もはや試さなくてもテストは通過するだろう。こんな上物に媚薬のテストは勿体無い。

そこでザスターは媚薬の投与を止め、薬物のテストに切り替える事にした。

実験の第二段階、それが肉体的な運動神経を高める麻薬「スターダスト」の投与である。

この第二段階の実験を通過した者は、この天誅会から心螺旋へと移送され、そこで更に様々なテストを受けることになる。

ザスターが知っているのはここまでだった。その後何が待っているか、その部分は知らされていない。

「スターダストは文字通り星屑。美しい星が流れるように、肉体を美しさを維持させ、そして強化される。」

彼女を「ここへ」

「はい」

「ザスター様」

真奈美と琴音がぐったりしている紅麗をザスターの元へ連れて行つた。

「これであの方たちもお喜びになるだろう。記念すべき第二審査通過、第一号だ」

「そう言う事だったのね」

「な、なにっ!!」

「紅麗!!」

それまでぐったりしていた紅麗が突然頭を上げ、目を覚ました。紅麗は瞬く間に真奈美と琴音を吹き飛ばし

ザスターから距離を取った。

「紅麗、あんた!」

「そんな・・・眠っていたはずなのに」

「お生憎様。あんな陳腐な睡眠薬を見破れないほど私はバカじゃないのよ」

「飲んでいなかったのね、フリをしていたんだ」

「そうよ。あの時飲料水を口に含んだとき歪から聞いた味とまったく同じ味がしたの。すぐに分かったわ。これには睡眠薬が入っているとね」

「やるね、お嬢さん。どうやら普通の女ではなさそうだ。何者だね?」

ザスターが聞いた。

「天誅、女神とでも言って置こうかな。私は死神じゃないしね」

「貴様、天誅、死神の仲間か!？」

ザスターの顔色が変わった。

「そんなところよ」

紅麗はそう言うのと部屋中を見渡した。

「最低ね。何が天誅会よ!結局やっている事は淫らな行為じゃない!教祖が聞いて呆れるわ!

さつき実験って言うていたけど、あんたたちの裏に何かあるわけ?」

「紅麗、あなたには関係ないことだよ」

「バカな女、あのままオネンネしていれば良かったのに」

真奈美と琴音はそう言うのと背後から聖龍刀せいりゅうとうを取り出し、それを前で構えた。

紅麗も咄嗟にズボンの中に隠し持っていたトンファーを取り出した。歪から貰った携帯用のトンファーだ。

鉄だろうと鋼鉄だろうと受け止めることが出来る。

「バカな女はどっちよ!! 宗教なんかは逃げて、拳銃の果てにはこのバカ男に飼ひ慣らされて性欲の奴隷?

おかしな組織に加担して、頭までイカれちゃったのね。最低よ!」

「紅麗、分かってないのはあんたのほうよ。人間いかに生きるかが大事なのよ。長いものには巻かれて

大きな野望に付いて行く。それがザスター様だったのよ」

「自分と言う存在まで捨てて、何が大きな野望よ! やっている事は人間以下じゃない」

「ザスター様、あの女は私たちが」

「ザスター様は上層部に報告を」

「分かった」

そう言うときザスターはきびすを返し去って行った。

「待ちなさい!!」

紅麗が詰め寄った。

「あんたの相手は私たちよ!!」

「真奈美、琴音」

「残念よ、紅麗。昔の友達を殺す事になるなんてね」

「冗談じゃない。あんたたちに殺されてたまるか!!」

「行くよ!!」

聖龍刀を翳した女たちが紅麗に襲い掛かった……。

7へ続く……。

END

第十六話 「新興宗教」(7)

真奈美たちの攻撃は紅麗に致命的なダメージを与える事は出来なかった。

毎日のように歪と共に殺人と言う仕事をこなしてきた紅麗は、それなりの武術を身につけている。

媚薬とドラッグ漬けにされた二人の攻撃などほとんど受けることは無かった。

「どうしてなの・・・どうしてこんな事になっちゃったの!？」

紅麗は二人の攻撃を受け止めながら言った。

「分かったような事を。こうなる運命だったのよ」

「今さら言ってももう遅いわ。後戻りは出来ないんだから」

「昔は私と巴と一緒に遊んでいたのに・・・カラオケ行ったり、買い物行ったりしたのに。」

それがどうしてこんな事になっちゃうのよ!」

紅麗は悲しかった。どうしてかつての旧友と戦わなければならないのか。あれほど仲の良い関係だったのに。

「それはあんだだっと同じでしょ、紅麗」

「えっ」

「あんだだっって今は天誅、死神側にいる人間。変わったのは私たちだけじゃない。あんたも十分変わったのよ」

「私は・・・」

「そうよ。殺人の片棒を担いでいるんだもの、私たちよりもタチが悪くはない」

「違う!! 私は誰も殺してない!」

「同じ事よ。殺しているのは天誅、死神。あんたはその影に隠れているのよ」

もはや返す言葉が無かった。確かにその通りなのだ。変わったのは彼女たちだけではない。紅麗も変わったのだ。

これに関しては今でも頭を悩ませている。苦悩している。一体何処でどう変わってしまったのか。

自分が悪いのか？それとも歪が悪いのか？いや全ては運命のせい。紅麗が歪と出会った時点で既に運命の歯車は狂い始めていたのだ。

「あの時」紅麗は歪と出会わなかったら何一つ変わらずに、失意のどん底から抜け出す事など出来なかっただろう。

だから変わったのは紅麗も同じなのだ。いくら悪人限定とは言え、殺人の片棒を担いでいる。

それは払拭できない事実だった。

「これで決めるよ」

真奈美と琴音は紅麗から離れた。そして改めて聖龍刀を握り直した。「私も確かに変わった・・・変わるしかなかった。だから殺人の片棒を担いでいると言われればその通りよ」

紅麗がそう言うと、真奈美と琴音は両サイドから一気に飛びかかった。

「だけど・・・だけど私は自分を売ったりしない！！！」

「ぎゃああっ！」

「ぎゃああっ！」

紅麗のトンファーは見事に真奈美と琴音の喉を捕らえた。同時に顎にもダメージを与えており、二人は脳震盪を起こし、床に崩れ落ちた。

「私のやっている事は間違っているかもしれない。だけど私は自分を変えたりしない。私は私」

紅麗の両目から大粒の涙が零れた。心を傷つけられた者が流す真の涙だった。

「素敵な言葉だ。自分を売ったりしないか。上出来だね」

「えっ・・・あっぐうっつ！！！」

目の錯覚か・・・紅麗の背後、それも少し離れた場所にザスターが立っており、その腕が紅麗の首を絞めに掛かった。

まるで腕が伸びているように見える。

「さすがに天誅、死神サイドの人間ともなるとお強いね。恐れ入ったよ」

「な、なんなの・・・こ、この腕は・・・」

「これかい？これは偉大なる我々の知識によって成せる業だ。改良に改良を重ねた傑作だよ」

そう言ったザスターの顔はとても人間の顔色とは思えぬ色をしていった。

「あ、あなた・・・まさか、じ、自分に麻薬を・・・」

「その通り。心螺旋が何をやろうとしているのかは知らんが、私が独自で開発した新種のドラッグだよ。」

人間を超越する魔の薬、魔薬とでも言おうかね」

「ぐ、ぐ、ぐうう・・・」

紅麗の首を絞める力は緩まない。

「密かに研究していたんだよ。これで心螺旋を唸らせる事が出来ると思っていたんだが」

まさか君のような女一人に邪魔をされようとは思わなかったよ」

「ああああっ！！」

締め付ける力が強まった。

「君のような優れた肉体を持つ人間を殺すのは少々惜しいが、事実を見られてしまったからには仕方ない」

「ひ・・・歪・・・」

「これで終わりだ」

ザスターは左腕を天高く振り上げた。手には斧が握られている。

「死ね！！」

紅麗は目を閉じた。もはやこれまでか・・・。

「そう上手くは行かないぜ」

「な、なにっ！！」

聞き慣れない声が響くと、ザスターの真隣で風が巻き起こった。紅麗の髪がその風によってなびく。

「ぎゃああああああっ！！！！」

「きゃああっ！」

凄まじい断末魔と共に、ザスターの右腕が切断され、紅麗はその勢いで後方へと吹き飛んだ。

切断されたザスターの右肩からは夥しい鮮血が飛び散った。

「かはっ！はあはあ……」

紅麗は締め付けられていた首を手で押さえながらむせた。

「ようやく見つけたぜ。まさか日本にまで手を伸ばしているとはな  
やはり聞いた事の無い声だった。

「貴様……一体何者だ！？」

「だ、誰なの……」

紅麗は頭を上げ、前を見た。

そこにはカーキ色のコートを羽織った男が立っていた。目鼻立ちの整った瑞々しい黒髪。

ドラゴンの爪を象ったプラチナのピアス。胸には同じくプラチナで出来たロザリオのネックレス。

右手には柄の無い日本刀、左手にも同じような刀が握られている。

「可愛い子に涙は似合わねえ。悪霊退散と行こうか」

8へ続く……。

END

第十七話 「新興宗教」(8)

「き、貴様……何者だ!!」

「これから死ぬヤローに名乗る必要はねえな」

両手に刀を持った二刀流の男は自信たつぷりの表情でそう言った。

「なんだとっ!!」

「てめえは所詮は心螺旋の使い魔に過ぎねえ。小悪党を殺ったところで何の意味もないが、始末しておかないと後々厄介だからな」

「心螺旋の事を知っているのか……」

「まあな。何かと縁のある連中でね」

心螺旋……紅麗には何の事か分からなかったが、何かの組織の名前である事は分かった。

「大丈夫かい？」

二刀流の男は紅麗に言った。

「大丈夫……。貴方は一体……」

「うひょー！改めて見るとやっぱり可愛いな！もっと早く出てくるべきだったかな」

「へっ?……」

なんなんだ、この男は……紅麗は思わず気が抜けた。

「いやあ、実はずいぶん前から隠れてたんよ。だけど君がどうなるか先が気になってさ。」

もしかしたら裸になるかも知れないじゃん？そう思うと出るに出来なくてさあ」

男は少年のようにオドケテイル。なんだこのお笑いなノリは。

「つまりあんたは私が捕らわれているの知ってて隠れてたわけ？」

「そだよ」

「そだよじゃない!!可愛く言えば良いとか思ってたでしょ!居るんなら早く助けなさいよ!!」

「だってえゝ勿体無いじゃん。せつかく無料で裸を拝めるかも知れ

ないのに」

「こ、こ、この・・・!!!」

紅麗の目が炎に変わった。

「じよ、冗談ですがな〜もうジョークだって」

「冗談に聞こえないつつの!!!」

その時、ザスターが男に詰め寄り、隠し持っていた剣を引き抜いた。

「おっと!」

「チツ!」

だが男は楽に交わした。

「君はそこにいな。すぐに終わる」

男はニヤリと笑って言った。

「すぐに終わるだと・・・?」

「ああ、そうだ。お前は今ここで死ぬ」

「ふざけやがって!!」

怒り狂ったザスターは斧を振りかざして男に襲い掛かった。

しかし男は強かった。狂ったザスターの猛攻を意図も簡単に受け流し、刀で斬り付ける。

「ぐうっ・・・」

「口ほどにも無かったな」

男が刀を振り上げたとき、ザスターは袖口から手榴弾を取り出し、そのまま投げ付けた。

「まずい!伏せろ!!」

「えっ・・・ぎゃあああああつ!!」

その瞬間、凄まじい爆風と共に手榴弾が爆発した。紅麗は壁に叩きつけられたが幸い軽症だった。

「おい、大丈夫か!」

「なんとか平気。あいつ、逃げたわ!追って、私は大丈夫だから」

「かわいい子ちゃんを放って行くのは俺の流儀に反するんだが、今回は仕方ない」

男はそう言つとザスターの後を追った。

「変な男……」

「紅麗!!」

男がザスターを追って階段を上がって行った時、歪が部屋に入ってきた。

「歪!! どうしてここに」

「無事のような。ザスターはどうした？」

「それが変な男が登場して、今まで戦っていたんだけど逃げちゃって、彼追いに行っただわ」

「男……?」

「そうなのよ! 二刀流の男。ドラゴンの爪を象ったピアスして、プラチナで出来たロザリオのネックレスしてた。

パツと見は結構イケメンだったけど、一人で大丈夫かな」

「二刀流の男!？」

歪は驚いている。どうやら何か知っているらしい。

「歪、知ってるの?」

「ああ、ちよつとな」

そう言うと歪はコートの中から愛用のショットガンを取り出して走り出した。

「あ、待って! 私も行く!」

「ござかしい!!」

男はザスターに追い付き、攻撃に転じていた。だがザスターもバカではない。男の刀を交わしながら反撃に転ずる。

持っている斧は空を切るが、徐々に男に詰め寄って行った。

「てめえのその腕は魔薬の影響か!？」

「そうだ。私が発明した傑作だよ。心螺旋に対抗するための最終兵器だ」

「腕切り落としたのに死なねえとはな……」

男はザスターの斧を受け止めながら言った。

「てめえの主は心螺旋だろ。裏切るのか!？」

「裏切るも何も無い。私は最初から心螺旋になど興味は無かった。

私は私だけで革命を起こす」

「革命だと？」

「そうさ、こんな風にな」

「な、なにっ!!」

男の背後は壁だったはず。しかしその壁を打ち破って数名の信者たちが男の手足を掴んだ。

「な、なんだコイツら!!」

信者たちの顔は明らかにおかしかった。皮膚の色は紫色に変色し、両目は虚ろになっている。

「ゾンビ・・・とまでは言わないが、魔薬によって生きる屍と化した狂信者たちだよ」

「うぐおお・・・」

信者たちは男の手足を凄まじい力で押さえつけた。これでは動く事ができない。

「ケツ！なるほどな。心螺旋の目的が何となく見えて来たぜ。やっぱり単なる麻薬組織じゃないな!!」

「私に取ってはもうどうでも良い事だよ。さあ、終わりの時間だ」

「ここに来た事を後悔し、そして死ぬ!!」

「クソッ!!」

「死ぬのはお前だがな」

男が「えっ・・・」と思ったときには既にザスターは真横に吹き飛んでいた。

男の視界にはウエスタンハットを被った男と、先ほど下の階で会った女が飛び込んできた。

歪は持っていたショットガンをザスターに連続して打ち込んだ。頭、胸、腹、両腕。

更に歪は男を拘束していた信者たちに強烈な蹴りを食らわせ蹴散らした。

「良いところで出てくるのは昔と変わらねえな」

「お前も人の事言えないだろう。最初から潜んでいるとは悪趣味だな」

「えっ・・・ちよつと待つて、なに？二人とも知り合いなの！？」

「まあ、ちよつとしたあれだ。腐れ縁つてヤツだ」

「お前と縁を持ったつもりはないがな」

歪がそう言ったとき、倒れていたザスターが突然起き上がった。

「な、なにっ！！」

「ぐふうう・・・て、天誅、死神だな・・・ハハハ、お前があの悪名高い死神か・・・」

「嘘！！頭を射抜かれてどうして！！」

紅麗が叫んだ。

「気をつける歪、コイツ普通の人間じゃねえ！」

男は持っていた刀を構えた。

「ドラッグか・・・」

「い、い、い、いかにも・・・ぐふう・・・我々の研究の結集だ・・・」

「お前心螺旋の者だな。何故心螺旋は日本に来た？」

「勢力拡大・・・それが心螺旋の目的・・・ぐふ・・・か、革命のときが・・・来た・・・」

「革命だと？」

「さつきも同じ事言いやがった。多分、他にも目的があるんだと思うが」

男がそう言った。

「聞け・・・天誅、死神・・・」

「なに・・・」

「お前たちはもう、逃れられない運命だ・・・いずれあの方たちがお前たちを殺しにやって来る・・・」

その時まで・・・せ、せいせい・・・楽しんでおく・・・んだな・・・」

ザスターの皮膚が爛れ、眼球が零れ落ちた。恐らく魔薬の副作用だろう。

「うっうっ……気持ち悪い!!!」

紅麗が呻いた。

「俺が殺されるだと？笑わせる」

「うっごおえ!!!」

歪はショットガンでザスターの額を打ち抜いた。その瞬間、ザスターの頭部は完全に吹き飛んだ。

「心螺旋か、殺されるのはお前たちの方だ」

そして静寂が訪れた。

「まさかお前が日本にきているとは思わなかった」

「ちよいと野暮用だね」

「野暮用だと？お前も心螺旋を追っているんだろっ？」

「あら、バレてたの」

「当然だ」

「ちよっとちよっと!!!二人とも知り合いなわけ？」

「俺の名前はシン・マイズナー。歪とはまあ言ってみれば同業者だ」

「俺たちと同じ裏社会で生きている。元はチャイニーズマフィアを束ねていた男だ」

「つつわけで、よろしく!!!」

シンはおどけた表情でそう言った。

それは新しい仲間が加わった瞬間でもあった。

END

## 第十八話 「心螺旋」

「シン・マイズナー。父親は中国人で母親はフランス人。2年前まで中国の暗黒社会でその名を馳せていたチャイニーズマフィアブラッディ・マリーのリーダー。今は現役を退いて裏社会で暗躍中。「中国版、天誅、死神」と言われ一躍有名に。」

歳は30歳。ふくん、私より年上か……。妻子は無く独身。歪とは昔から付き合いがあり、同じ殺し屋家業。なるほど、通りで中国つばいなくと思つたよ。」

紅麗はテーブルに頬杖を付きながら読み終わった書類を置いた。

「そう、残念ながら、誠に残念ながら妻子が居ないんだ。もし良かったら僕と結婚してね！」

シンはそう言つと紅麗の両手を取つた。

「イヤよ。触らないで」

そう言つと紅麗はシンの両手を振り払つた。

「ガーーーーーン!!そんな〜即答しなくても良いじゃない!!それに投げ捨てるのは止めてえ!」

「はいはい」

紅麗は半ば呆れている。なんなんだ、この男は……。それが紅麗の感想だつた。

「くうう……。紅麗ちゃんはガードが固い!!こんな良い男が目の前にいるのに」

「自分で言うか?普通。確かにイケメンだとは思つけど、私は外見で判断する女じゃないの。」

それに、初対面同然で手を握ってくる男なんてタイプじゃないわ」「んがつ!!」

それはシンが石になった瞬間だつた。

「ハ、ハッキリ言うなくでも、だからこそ落とし甲斐があるのだ!!どわはははは!!」

シン・・・何処までも前向きな男だ。

ザスターとの死闘の後、3人はパトカーのサイレンを聞きながらアジトに戻ってきた。

現場には例のように「天誅、死神」と書かれた紙を置いてきた。と言ってもシンが無理矢理置いたのだが・・・。

そのうちマスコミがまたもや死神事件が発生と、まくし立てるだろう。

そんな中、帰ってきて早々に紅麗はシンのプロポーズを断わったわけだが・・・。

明らかになったことがあった。それは歪が追っている麻薬組織の名前が「心螺旋」であると言うことだった。

それに涼風杏里から得た情報を重ね合わせると、どうやら単なる麻薬組織ではないようだ。何か裏がある。

それはザスターの異様振りを見れば一目瞭然。ヤツは致命傷を負いながらも死ななかった

それに麻薬を「魔薬」と呼んでいた。魔薬とは一体・・・。

「シン、お前どうして日本に来たんだ？」

「今さら説明する必要も無いと思うが、心螺旋を追って来たのさ。

連中が勢力を拡大し、本格的に日本のマーケットを置くと言う話を聞いたもんでね」

「何で心螺旋を追うの？」

「別に理由は無いよ。ただ仲間が数人連中に殺されてね。そのバツクにはいつも心螺旋があった」

「天誅会にも背後には心螺旋・・・。なんかヤバそうな雰囲気ね。ところでさ・・・。」

紅麗はそこで言葉を区切った。

「歪は今まで何してたの？ずっと居なかったよね」

「心螺旋からの生き残りが日本にいると言う情報を掴んでな。会いに行っていた」

「心螺旋からの生き残り？」

シンが目を細めた。

「名前は涼風杏里。彼女は2ヶ月前まで心螺旋のメンバーだったが、次第にエスカレートする組織のやり方に付いて行けず

退会を申し出たそうさ。だが組織は彼女をただでは退会させなかった」

「どういうことだ？」

「実は……」

歪は杏里とのやり取りをそのままシンと紅麗に説明した。

「なるほど。しかし妙だな。なんで組織は彼女を殺さなかったんだ？」

「俺にも分からん。だが彼女には特殊な能力がある。それと関係しているのかも知れん」

「凄いね。一度も会ったことがないのに、遠くはなれた場所からも私の危険を察知するなんて」

「記憶と光を失った少女が。心螺旋は一体何が目的なんだ」

「今のところ詳しい事は分かっていない。だが何か裏がありそうさ」

「それにあのイカレ教祖ザスターの異様振りにも気になる」

「あ、それならちよつとだけ何か分かるかもよ」

そう言うと紅麗はパソコンの電源を入れた。シンと歪はパソコン画面に近づいた。

「あの時気になったからザスターの写真を撮っておいたのよ。これをパソコンに取り込んで内視鏡にリンクさせれば

ザスターの体内がある程度見えてくるよ」

「ほへえ、紅麗ちゃん凄いね」

「へへ、これくらいはね」

そう言うと紅麗は早速取り込んだ画像を予めパソコンに導入してあった内視鏡に置いてみた。

一見すると変わった部分は見当たらない。だが頭蓋骨の断面図に画

像を切り替えると、妙な部分が写った。

「なんだこれは……」

歪が言った。

「これ、注射の跡よ」

「注射？」

シンが紅麗を見ながら言った。

「うん、頭皮から直接撃ったんだわ。信じられない、この画像を見る限り、注射器の針は脳まで達している」

「なるほど、何となく分かってきたな」

「何がだ？」

シンが歪に聞いた。

「ヤツが言っていただろ、魔薬だと。この注射の跡は恐らくその魔薬を撃った跡だ。紅麗、脳波を調べてくれ」

「分かった」

紅麗は画面を切り替えた。するとおかしな数字が表示された。

「おかしいわ、アドレナリンの分泌が異様に多い。こんな数字普通じゃないよ」

「恐らくヤツが作った魔薬と言うのは脳内のアドレナリンを異常なほど高める効果があるんだろう。」

他にも何か影響があるんだろうが、延命に役立つ何がある。それでヤツは死ななかつた。

いや、一時的に死ぬことを免れた」

「ザスターは心螺旋の下つ端って聞いてるぜ。そんな下つ端がこんな事をしていたとなると……」

「ああ、少なくとも心螺旋もこういう人の道から外れた事をするのが目的だろうな」

「冗談じゃねえ、これじゃまるでゾンビじゃねえか」

「神をも恐れぬってヤツね、考えただけでゾツとするわ」

「だが俺たちが得た情報はあくまで心螺旋の一部に過ぎん。日本にまで手を出した理由も明確ではない。」

この先連中が何らかの動きを見せる事は確かだ。俺たちが連中を追う限り、いつかその時がやって来る」

「合間見えるとき・・・つまり戦のときってヤツか」  
シンの言葉に、歪は頷いた。

「これからどうする？」

紅麗が聞いた。

「特に何もしない、いつも通りだ。その時は必ずやって来る。必要最低限の情報を入手しておけばそれで良い」

「いつか殺し合う運命ってわけか」

「俺たちが連中と関わっている限りな」

これは幕開けに過ぎない・・・。そんな雰囲気は三人を包んでいった。

いつか来るであろう心螺旋との戦い。それは回避できない宿命になるだろう。

「て言うか、歪ぎ。私が危険な目に合っているとき、女と会っていったんだ。

ふーん・・・ねえ、どんな女？可愛いのか？それとも綺麗なわけ？ねえってば！！」

「紅麗ちゃん・・・目に殺気が・・・」

「シン、なんか言った？」

紅麗の目が座っている・・・。

「な、なんでもありません」

前途多難・・・いろんな意味で大変な展開になりそうである。  
ちゃんちゃん

END

## 第十九話 「それぞれの想い」(1)

何でも屋、そして始末屋には平日も休日も無い。

仕事があれば仕事になるし、仕事が入らなければ休日となる。

最も、何でも屋と始末屋の2つの仕事で稼いだ金はかなりの巨額となっている。とりわけ裏家業「始末屋」の報酬は

何百万単位から始まり、中には億単位の場合もある。それを考慮すると仕事をしなくても後10年くらいは不自由する事無く生活する事が出来る。

それに甘んじているわけではないのだが、安堵感はあるのは事実だった。

金の管理は全部紅麗が行なっている。銀行の通帳から印鑑、暗証番号まで全て管理している。

毎月歪にある程度の金は渡すが、足りなくなった事は一度も無い。勿論「足りない」と言われればいくらでも渡すつもりだ。

だが歪はほとんど金を使わなかった。普通の男のように飲み食いに金を使うような男ではない。

使うとすれば愛用のショットガンのメンテナンスで使うか、携帯用のナイフに使われるかのどっちかである。

金もあり住む場所もある。それが紅麗を安心させる要因だった。

今日は仕事の予定は無い。ここしばらく天誅会の件で時間を取られまともに睡眠を取っていなかった紅麗は

昼頃まで寝ている予定だった。しかし凄まじく食欲をそえられるような香りが部屋中に漂い、思わず目が覚めた。

「うーん……」

ベッドの中で伸びをすると、遮光カーテンの隙間から差し込む太陽の光に目を向ける。今日は天気が良いらしい。

紅麗の部屋を出ると、小さな通路挟んだ反対側にキッチンがある。

今日はそのキッチンが騒がしい。

何かを焼く音や煮る音、水の流れる音などが頻繁に聞こえる。

「なんだろう・・・」

紅麗はあくびをしながらカーテンを開け、部屋の扉を開けて外に出た。

キッチンからの音は未だ続いている。それにしても良い匂いだ。紅麗のお腹は正直に悲鳴を上げた。

「ハロー、紅麗ちゃん」

そこにはエプロンをしたシンがいた。どうやら料理を作っているようだ。

「おはよー・・・ってちょっと待て！！なんで貴方がここにいるの!?!」

「えっ?なんでって、今日からお隣に住むことになったんだ。だから食事くらい一緒にしようと思ってね」

「隣について・・・どこの隣のこと?」

「そこ」

シンが指差したのは今は使われていない歪と紅麗のアジト内にある一室だった。現在は物置になっている。

「おもいつきりウチじゃないのさ!!隣とは言わないでしょ!」

「似たようなもんだよ、これで四六時中紅麗ちゃんと一緒に居られるんだ!俺は幸せ者だな」

「あんただけよ、そう思ってるのは」

「ガーーーーーン!!シンちゃんシヨック(つまりシヨックと言いたい)」

「大体なんで同じとこに住まなきゃいけないのよ!自分の家あるんでしょ」

「いやそれがないんだよね。俺昨日日本に着いたばかりだからさあ、妙に嬉しそうなシンの顔が憎い。」

「歪は良いって言ったわけ?」

「俺は別に構わんぞ・・・って言ってました」

「……あのやるー」

「うーん、それにしてもノーメイクでも可愛いんだな、紅麗ちゃん  
は」

「へっ……」

「瞬間の刹那……まだ起きたばかりである……」

「うぎゃあああああつー！そうだ！まだスッピンじゃないの！  
忘れてた！」

「アハハハ！良いじゃん、可愛いよ」

「騙されないわよ、あんたみたいな人は油断ならないわ、これでど  
うだー！」

紅麗はオモチャの変装道具であるお面を被った。何故かデザインが  
ウルトラマンであるのだが……

「ふふん、これで見えまい！」

「あーそれだったら化粧してきた方が早いと思うんですけど」

「凄い！こんな料理見たこと無い。これ何料理？」

「これは中国料理だよ。まあ本場中華の味ってヤツだ。美味しいこと  
保証済みだ」

「ううう……美味しそう……」

「まあ座って食べてくれよ。俺と紅麗ちゃんとの出会いを祝って作  
ったんだぜ」

「ううん、祝わなくて良い。だけど早く食べようー！」

「な、なにいいー！そんな殺生な……」

そんなシンだが、内心では「可愛いから許す」と思っているのだ  
る。

「いただきますーすー！」

「どうよ？美味しいだろー！」

「美味しい！凄い、こんな美味しいの初めてかも……」  
単純に紅麗は感動した。本場中華の味は初めて味わった。

「どわはははは！喜んでもらえて嬉しいぜ」

シンも上機嫌である。

「そう言えば歪は？」

「ああ、あいつなら出掛けたよ。昨日話した涼風杏里さんだったっけか？彼女に会いに行くって」

「・・・！？な、なんですって・・・」

紅麗の箸が止まる。それと同時に両目に殺気が宿り、目が炎に変わる。

「あ、いや、なんかこれまでの報告に行くとか・・・言っていましたね、ハイ」(^^;)

「あつそ。なによ、朝っぱらから女ですか！美味しいから歪の分も取って置いてあげようかと一瞬考えたけど」

「考えた・・・けど？」

「食べてしまええ！！」

そう言うつと紅麗はガツガツ食べ始めた。

「あ、あの、紅麗ちゃん、あまり食べ過ぎるとコレステロールが・・・」

「ふん！！たまには多めにコレステロール取ってやるうじやないの！！」

もはやメチャクチャである。

「ところでどうしてシンさんは心螺旋を追っているの？」

「シンさん・・・ってのはちょっと余所余所しいな。シンで良いよ中華麺を口に含みながらシンが言った。

「いや、私より9つも年上だし・・・どう呼ぼうか迷っちゃって、ハハハ」

「可愛いな、紅麗ちゃんは。まぢ惚れそう」

「相変わらず軽い男・・・」

紅麗の声のトーンが下がる！

「んがつ！！なんだ、つい今まで可愛い感じだったのに、急に目が座るなんて」

「シンがどうして独身なのか分かったわ」

「へっ?」

「その軽さよ。好きとか愛してるとか結婚しようとか、誰にでも言ってるでしょ」

「うっ!!急に腹が!!」

「猿芝居・・・凶星。はあ、やだやだ、軽い男って」

「そ、そんなあ」(T・T)

シンと紅麗、なかなかナイスなコンビである

2へ続く・・・。

END

## 第二十話 「それぞれの思い」(2)

「心螺旋は中国のみならず、各国でその勢力を広げて暗躍している。俺は中国とフランスのハーフだが

小さい頃からずっと中国で育ったんだ。親父の会社が中国にあるし、オフクロも中国が好きだった。だから自然と中国で生活するようになったんだ。

だから中国は俺にとって故郷、大事な国だ。そんな故郷で悪のウィルスをばら撒いている心螺旋が許せなくてね。」

「許せないか・・・その気持ちだけで心螺旋を追っているの？」

「いや、それだけじゃない。他にも連中を追う理由はある」

そこまで喋ったシンの表情が一気に曇った。先ほどのおちゃらけた秀囲気は消え、真剣な顔になっている。

「どうやらただ事ではなさそうだ。」

「そっか・・・ま、まあ人にはいろいろあるよね。私も歪も事情あるし・・・」

紅麗はそう言うとかラになった皿を片付け始めた。

「友人と家族が殺されたんだ」

「えっ？」

「俺は元々はチャニーズマフィアで大きな組織を持っていた。今思えばバカなことしていたなと思うよ。」

当時俺と一緒に中国の裏社会で暗躍していた友がいた。彼とは親友でね。ずっと行動を共にしてきたんだ」

紅麗は何も言わなかった。

「俺たちは自分たちが中国のナンバー1だと思っていた。けどあるとき、心螺旋と言う組織が同じ中国で幅を利かせていると言う情報を知ってね。まだ若かった俺たちは心螺旋を潰そうと計画を練り始めた」

「組織同士の抗争ってヤツ？」

「そうだね、簡単に言ってしまったえばそんな感じ。計画は順調に進んだ。そして心螺旋と戦争が始まったあの日……全てが終わったんだ」

シンは古傷の跡をこじ開けるように、記憶を辿った……。

「シン、連中の目的はなんだと思う？」

「さあな、でも不気味な連中だつてことは確かだぜ」

シンは撃ち返しながら相棒のダレスにそう言った。

「でもよ、中国ナンバー1は俺たちだぜ、ダレス」

「ああ、勿論だぜ。ブラッディ・マリーをナメたらどうなるか、教えてやるうぜ!!!」

「よし!行くぞ!」

シンはダレスと共に飛び出し、持っていたマシンガンで応戦した。

二人は心螺旋の本部が置かれている施設に侵入した。もはや後から追ってくる仲間は誰もいない。どうやら自分たち以外はやられてしまったようだ。

「もう俺たちしか居ないようだな」

シンがマガジンを交換しながら言った。

「俺とお前さえいればブラッディ・マリーは健在さ」

「それもそうだな」

薄壁一枚隔てた向こうに幹部たちがいる。そう悟ったシンとダレスは一気に飛び出した。

「あ、あれは……」

「う、嘘だろ……」

そこで二人はとんでもないものを見てしまった。

「ケリー!マリア!!」

両足を拘束され、逆様の状態で天井からぶら下がっていたのはダレスの妻、ケリーと娘のマリアだった。

二人とも頭部を撃ち抜かれ、もはや息は無かった。

「嘘だろ……そんな……こんな事が……クソツタレ!!!」

キレたシンは四方八方に撃ちまくった。

「ケリー・・・マリア・・・ああああ・・・どうしてこんな事に・・・」

「ブラッディ・マリーをナメたらどうなるか教えてやる・・・とか言っていたな」

「だ、誰だ!!」

その声は何処からともなく響いた。どうやらこの部屋ではない、別の部屋からマイクを使って喋っているのだろう。部屋の四隅にあるスピーカーから声が聞こえた。

「目の前にある残骸は我々心螺旋をナメたらどうなるか、その答えだ。後悔するが良い」

声が途切れたのと同時に、目の前の扉が開いた。その奥から響く低い唸り声。

シンとダレスの前に現れたのは2匹のトラだった。

「後悔だと・・・ケリー、マリア・・・うおおおおおっ!!」  
「ダ、ダレス、よせ!!」

怒りで我を忘れたダレスは2匹のトラを避け、奥へと進んで行った。シンもその後を追いたかった。

だが2匹のトラは完全にシンを敵として認めているらしく、飛ぶが如き勢いで襲い掛かってきた。

「くそっ!!」

「ぎゃあああああっ!!」

「ダ、ダレス!!」

シンがトラと応戦している最中、奥の部屋から断末魔の如きダレスの悲鳴が響いた。

だが助けに行く事は出来ない。襲い掛かる野生のトラは凶暴でシンもかなりのダメージを負ってしまった。

「や、止める・・・ぐぎゃあああああっ!!」

「ダレス!!」

ようやく2匹のトラを撃退し、満身創痍の状態で奥の部屋に向かっ

たときには、既にダレスは事切れていた。

身体中をズタズタに引き裂かれ、首が切断されると言う無惨な状態で……。

「ダレス……ああああ……あああああつ！！」

「その後施設は爆破され、俺は意識不明の重体になった。一時は危篤状態まで追い詰められたが、何とか元通りになったんだ」

シンはテーブルに膝を着き、静かに話し終えた。いつの間にかテーブルは片付けられ、向かいの席には紅麗が座っている。

「それじゃ復讐のために心螺旋を？」

「それもある。だけど別の理由もあるよ。単純にあんな危険な連中を放っておくわけには行かないと言う理由がね。」

野放しにしておけば、また犠牲者が増える。それだけは何としても避けたいといけない」

「そっか……でも凄い偶然だね。シンが追っている人たちと歪が追っている人たちが同じなんて」

「そうか、紅麗ちゃんはまだ聞いてないのか」

「えっ？聞いてないって何が？」

「どうして俺と歪が知り合いだと思う？」

「どうしてって……昔から知り合いじゃないの？」

「違うんだ。歪が心螺旋を追っているのは偶然じゃない。俺と同じで目的があるんだ」

「えっ……」

「だっておかしいと思わない？天誅、死神は世の中の悪事を潰す人間。その裏には抹殺することを依頼した依頼主がいるからこそ

成り立っているわけでしょ？だけど心螺旋に関しては依頼主なんていない、にも拘らず歪は動いている。それはどうしてか？

答えは簡単さ、歪と心螺旋は関係があるって事だよ」

紅麗は今までの歪を振り返ってみた。言われて見れば今回の心螺旋に関して依頼主はいない。

本来の歪の性格を考えると依頼がない限り彼は動かない。やってい  
る事は人殺しだが、無益な殺生はしない男だ。

そんな彼が独自に動いている。それにはそれなりの訳があるはずだ。  
しかし、紅麗はそれを知らない……。いや、知らされていないの  
だ。

「どう言う事なの？歪が心螺旋を追う理由ってなに？私、何も知ら  
ない……」

「こんな可愛いレディに隠し事をするとは、歪もまだまだジエント  
ルマンには遠いな」

シンは笑わせようと思っただけだが、紅麗の目は潤んでいた。

「分かった、話すよ。ただこれを聞いたら歪に対する見方が変わっ  
てしまうかも知れない」

「平気、凄惨なものなら私だって何度も見て来たから」

恐らく紅麗にも何か黒い過去があるのだろう……。シンは瞬時に悟  
った。

そしてシンは語り始めた。真っ黒に染まった歪の過去を……。

3へ続く……。

END

## 第二十一話 「それぞれの思い」くさく

例え光を失ってもその日の天気は窓の方に顔を向ければ分かる。

窓のカーテンは毎朝の検診のときにナースが開けてくれるため、その向こう側にある天気はすぐに分かる。

窓へ顔を向けたたとき、暗闇の中に赤い色が差し込んできた日は天気が良い日だ。

快晴とまでは行かずとも、空は晴れている。それが証拠に窓から暖かい太陽の光が感じられる。

逆に視界が赤くならないときは曇り、あるいは雨だ。しかし雨の場合合は音で分かるので、雨音が聞こえない日は曇りだと判断できる。

光を失って以来、涼風杏里はそれ以外の部分が発達するようになった。特に急激に発達したのが聴覚だ。

目が見えない分、音によって状況を判断するようになった杏里は、相手がどれだけ静かに部屋に入ろうともすぐに察知できる。

例え忍び足で入って来ようと、わずかな衣服の摩擦音などで分かっってしまうのだ。

それに発達した部分は他にもある。それは人間の体温を感じる事が出来る部分だ。

基本的に病室は冷たい。壁の床も温度は感じられず、酷く無機質だ。しかしそんな場所に温度を持った人間がやってくると、その部分だけ暖かく感じるのだ。

例え気配を消そうと、人間は己の体温を消す事は出来ない。その体温の大きさによってある程度の身長が分かる。

体温が縦に長く感じる場合は長身。逆に短い場合は身長の高い人間横に広く感じる場合は太っている人間。更にその体温の質によって相手の装いまで何となく分かる。

服装が明るい場合は体温を強く感じる。逆に黒やダーク系の場合は内側に体温が籠る。

その数が一つなら一人、二つなら二人と、人数まで分かってしまうのだ。

先ほどから感じる気配と体温には覚えがあった。その人物が病室に現れたのは1分前。

それから何も言わずに部屋の片隅に立っている。杏里はそちらに顔を向けているのだが、やはり口を開かない。

彼らしい・・・初めて彼が訪れてきたときもそうだった。(見つけられるのを待っているのかしら)

なんだか可笑しくなって杏里は笑った。

「こんにちは、死神さん」

杏里から口を開いた。

「何度試しても無駄のようだな。やはり分かかってしまう」

「フフフ・・・無駄ですよ、すぐに分かりました」

やはり声の主はあの時「天誅、死神」と名乗った男だった。

「彼女、助かって良かったです。予期せぬ方が登場したようすけど」

「凄いな、何も言っていないのに分かるのか」

「はい。お仲間さんも増えたようですね」

「仲間かどうかは分からんがね」

歪は表情崩して言った。

「天誅会、やはり心螺旋と繋がっていたんですね」

「ああ、教祖のザスターは心螺旋の犬だった。見えるのなら何が起こったか、分かるか？」

「ある程度は・・・魔薬、恐ろしい薬物ですね」

「今日、俺がここに来たのはその魔薬の事だ。この言葉に覚えはないか？」

「何度か聞いたことがあります。私がまだ心螺旋の窓口だった頃、幹部の人たちが第一段階「魔薬」と言っていましたから」

「第一段階？」

「ええ。それが何を意味するのかは分かりませんが」

第一段階とは一体どう言う意味だろう……。何かの実験をしているのか、だとするとザスターが使っていた魔薬とはまだ未完成のものなのか？

しかしザスターは魔薬は対心螺旋用に開発したものだと言っていたではないか。

それを心螺旋が知っていたとなると、第一段階の魔薬とはザスターが開発したものでありながら

その存在を心螺旋は知っていたと言うことか。そう考えるとザスターが心螺旋の犬と言う役割も領ける。

心螺旋はザスターを使いまわし、利用したのか……。

「私の方から質問しても良いですか？」

歪が考え事をしてしていると、突然杏里が言った。

「なんだ？」

「貴方はどうして心螺旋を追うんですか？天誅、死神はこの世の悪事を絶つ方だと伺っています。」

世間では貴方を悪のヒーローと称する人も多くいるらしいですね。

そんな方が何故心螺旋を？」

「この世の悪事を絶つ、悪のヒーローと言うのは世間が勝手に付けた俺のイメージに過ぎん。」

俺はあくまで依頼を果たしているだけだがな」

「そうなんですか、お仕事なんですね」

人殺しを平気でお仕事と言ってしまう杏里は天然系と言えるだろう。

「心螺旋とはちょっとした因縁があつてね。連中とはいわずれ戦う運命だ」

「悲しいですね。血で地を洗うなんて」

「避けられん事だ」

歪がそういった後、杏里は歪の未来を覗こうと試した。しかし何も見えなかった。

ただそれとは別の映像が見えた……。

「一つ、俺からも予言したい事がある」

「予言・・・ですか？」

「ああ、俺の予言だ。確実に当たる」

「興味深いですね、是非教えてください」

杏里がそう言うと歪は一呼吸を置いた。

「そう遠くない未来、お前は俺たちと行動を共にする事になるだろう。その時を楽しみにしている」

その声が途切れた直後、死神と名乗る男の気配は完全に絶たれた。

「奇遇ですね、実は私にも同じ映像が見えました」

杏里は誰も居なくなつた部屋で一人呟いた。

4へ続く・・・。

END

二十二話 「それぞれの思い」(4)

「歪がベトナムで産まれた・・・ホントなの？」

「ああ、当時のベトナムは宗教勢と反乱軍、そしてベトナム軍との宗教戦争が活発だったんだ。」

勢力には歪の両親が所属していた宗教勢の方が劣勢だった。だが当時のベトナムは飢えと貧困に悩まされていて

物資のホントをベトナム軍が所有していたらしくてね。宗教勢は日に日に弱って行ったんだ」

先ほどから語りだしたシンの話は、紅麗にとってはあまりにも衝撃的な内容だった。

「兵士は次々と餓死し、勢力は極端に下がっていた。そこで宗教勢は金字塔に打って出た。」

それがシャイニングスターと言う麻薬の投与だったんだ」

「シャイニングスター・・・？」

「ああ。文字通り輝き続けるスター。翻せば戦い続ける狂戦士だ。」

この麻薬に含まれている力によって

投与された人間は極端に筋肉が発達し、死ぬまで戦い続けたと言う話だ」

「酷い・・・」

「ああ、本当にね。俺もそう思う」

「でもそれと歪がどう関係あるの？」

「実はこの戦争で勝利を収めたのは宗教勢でもベトナム軍でもなく、反乱軍だったんだ。」

生き残った兵士や人間たちは皆、反乱軍によって拘束され強制収容所などに移送された。幼かった歪も当然移送された。

だがシャイニングスターによって命を落とした両親を含め、その死体の処理を任されていた歪は

既にこの時から心に鬼と悪魔が住んでいた。あいつは収容所から脱

走する事を決めたらしい」

「歪が死体の処理を……」

紅麗は思わず口を押さえた。信じられなかった。

「ああ、有に100人以上の死体をたつた一人で解体し、始末したようだ」

「嘘……」

「脱走を決意した歪に必要なのは何より力だ。まだ幼かった歪が巨大な施設から逃げ出すのは力が要る。

しかし当時の歪はまだ小学生と同じ年代の男の子。当然の事ながらそんな力は無かった」

紅麗は聞き入るように耳を傾けている。

「そこで歪はある事を思い付いた。手っ取り早く力を手にする方法がある……それが」

シンは言おうか言うまいか迷った。しかし真剣に聞く紅麗を裏切るわけには行かない。

「シャイニングスターの投与だったんだ」

「なっ……そ、そんなこと……」

「シャイニングスターを自らの身体に投与すれば信じられないほどの力が付く。文字通り狂戦士と化すからね。

それだけの力を手にする事が出来れば脱走する事も可能だと判断した歪はシャイニングスターを自分の身体に打ち込んだ」

「バカよ!!信じられない……」

「シャイニングスターはその効果が効いている時間は無敵の狂戦士になるが、効果が切れると凄まじい副作用に襲われてしまう。

幻覚作用だけでなく、脅迫概念や精神分裂なども訪れる。それでも歪は打ったのさ、生きるためにね」

「それで……どうなったの？」

「あたり一面血の海。逃走は見事に成功。シャイニングスターを投与した歪に虐殺された人間は200人に及んだ」

「に……200人!!!」

「どれも酷い有様だったらしい。原型を留めないほどに」  
「……………」

「脱走には成功したが、やはり禁断症状が出た。ドラッグの副作用さ。凄まじい症状に襲われたようだが」

歪は肉体がまだ幼く、若かったため奇跡的に一命は取り留めた。だがその後10年間、歪は副作用に襲われ生死の境を彷徨ったらしい」  
シンは紅麗を見た。さすがにショックだったのだろう。紅麗は泣いていた。

「その後ベトナムで歪を見た者は居ない。いつの間にか居なくなっ  
たらしい。そしてヤツは人知れず日本へ戻ってきた。」

それが今から9年前だよ。日本に戻った歪は様々な事を学び、自分の家族を死に追いやったシャイニングスターの事を調べ始めた。  
その結果、ある事実が浮かび上がった」

「事実？」

「うん。歪は掴んだんだ。シャイニングスターを作った組織をね、  
その組織こそが……………」

「心螺旋……………」

「そう言う事」

全ての謎が明らかになった。何故歪がこの組織を追いかけているのか、その謎が解けた。

歪は憎んでいるのだ。自分と家族を死に追いやったシャイニングスターを、そして心螺旋を。

「大丈夫かい？」

シンは紅麗の肩をそっと撫でた。紅麗の目から流れる涙は一時的な感情の涙ではない。

心底悲しんでいる大粒の涙だった。

「うん…………辛かったんだよね、きつと…………たった一人でさ…………  
誰も味方が居なくて」

「…………アイツは当時の事を地獄だったと言っていたよ」

「私だったらきつと耐えられない…………自殺しているよ」

「あの難儀な性格はそういう過去を背負っているからなんだろう」「何かあるんだろうなとは思っていたの……。だけどここまで苛烈とは思わなかった」

無理も無い。紅麗にとってはまったく知らされていなかった事実なのだから。

「歪は話してくれなかった。長い付き合いなのに全然彼のこと知らない……」

どうやらそっちの方が辛いらしい。言葉が詰まってしまっている。

「あいつと付き合いが長いなら分かるだろ。歪は自分の事を話すよな男じゃない」

「だけど、だけどさ……」

「まあ、気持ちには分かるがね。だけど何かを背負っている男つてのは自然とそうなってしまふもんだよ。俺だつてそうなんだけどね。

「ミステリアスな感じ？がはははは！！」

「あんたは自分から喋ったじゃない」

途端に紅麗の表情が変わった。涙は枯れ、白い目でシンを見ている。

「自分からあれよこれよとまあ良く喋つてたわよ〜！」

「あら??そうだったかしら?」

「それで何がミステリアスよ……白々しい……」

「うはっ!!俺つてお茶目」

「アハハハハ!!」

そうは言つた紅麗だったが、それがシンの気遣いである事は気付いている。

「俺も是非聞きたいことがあるんだ」

「なに?」

「どうして君のように可愛くて素直な子が歪と一緒に居るんだろうつて思つてね。」

こう言つちやなんだが、俺たちのいる裏社会に、紅麗ちゃんのような可憐な女の子は似合わないと思うんだが」

「それつてつまり私と歪の出会いは?つて事よね?」

「まあ、平たく言えばそんな感じかな」

紅麗は一瞬戸惑った。そして自分に問い掛ける。本当に話して良いの？と本当に自分を見せて良いのだろうか。

これまで歪との出会いは誰にも話さなかった。自分の過去を思い出して辛い気持ちになるだけだから。

でも今日の前に居るシンは自分から過去を話し、そして自分を気遣ってくれる相手である。

「あっ、でもその、別に無理に話してくれとは言わないよ。女の子だしな」

シンは話の方向を変えようとした。

「ううん、良いよ。誰にも話した事無いんだけど、もう話せることだから」

そして紅麗は静かに語り始めた。

黒神 歪との出会いを……。

5へ続く……。

END

## 第二十三話 「それぞれの思い」くさく

紅麗には両親と一緒に過ごした記憶は残っていない。それもそのはず、紅麗の実の両親は紅麗を産んだ後

交通事故によって他界している。事故当時、車には紅麗も乗っていたのだが

まだ幼い赤ん坊だったためシートと足元の空間に落ちた事で難を逃れた。

紅麗は当時赤ん坊だったのにも関わらず、事故当時の感触は残っていた。

だが肝心の両親に対する記憶はまるで無かった。もし事故後何不由なく生活する事が出来ていれば

多少なりとも記憶は残っていたかも知れない。しかし、事故後の彼女を待ち受けていたのは

あまりにも辛すぎる現実だった……。

「事故の後私は親戚の間で誰が引き取るのかでかなりもめたらしいのね。ウチの家計はどっちも裕福じゃなかったから

経済的にも厳しいのが現状だったみたいでさ」

「何処にでもありそうな家庭だね。裕福よりも貧しい家庭のほうが多い」

「うん。だけどウチはその極端な例だったと思うよ。今思うと笑っちゃうけど、着る服2着しか無かったんだよ」

「マ、マジ？」

「うん！それに財布とか持ってなかったんだよ、初めて自分の財布持ったの高校生の時だし」

「それはちよつと極端だな」

シンは苦笑いを浮かべていた。

「でしょ？すんごいピンボーよね」

紅麗も笑っていた。

小学校に入学するまでの間、紅麗の引き取り先は決らず児童施設で過した。

小学校へ入学すると彼女の引き取り手が現れた。それが最終的に紅麗の両親の役割を果たした二人だった。

紅麗とは遠い親戚に当たる存在で見た目は何処にでもいそうな夫婦だった。

そのため、引き取る際の施設側の審査も問題なく通過した。しかしその事実が後の悪夢を引き起こす引き金になってしまったのだ。

引き取った当時はまだ良かった。それなりの生活が出来たし不自由する事も無かった。

だが引き取られて3年目、一つの転機が訪れた。

当時この夫婦が経営していた企業で汚職事件の内部告発が起こり、会社は倒産に追い込まれてしまった。

刑事責任を問われる自体にまで発展した二人は、当然従業員からの強いバッシングにあった。

倒産に伴い、解雇した従業員の再就職先はどうなるのか？責任は取れる？などがメインだった。

実際に汚職は行なわれており、この夫婦は巨額の金をかすめていた事実が発覚し逮捕されてしまった。

一人残された紅麗はたまったもんじゃない。二人が逮捕された当日の夕方、ガラの悪い数名の男たちがやって来た。

どうやら従業員たちとの繋がりのある暴力団組員のようだった。

本当なら二人を恐喝して金を奪おうと言う目的だったのだが、いざやって来るとそこに金目のものは無く

あるのは残された幼い少女のみだった。これでは何の意味も無い。

そこでこの数名のヤクザたちは幼い紅麗を組に連れ去った。

金目の物は無くても女は役に立つ。それが何を意味するのかこの時点では紅麗には分からなかった。

中学に上がるまでは普通だった。周囲にいるヤクザたちも紅麗の面倒を良く見ていたし、学校にも通わせてくれた。

着る服もある、お金もある程度はある。幼い頃から心に深い傷を持ち続けている紅麗にとつて

ヤクザに拉致され、そこで育てられると言う辺境の生い立ちは、別に特異なものだとは思わなかった。

しかし、中学3年にもなるとそれまで普通だった組員たちの態度が豹変。

女の中学3年ともなれば発育の進む時期である。組員たちの淫らな視線が向けられるようになったのだ。

そしてその視線は視線だけに留まらず、とうとう一線を越えてしまったのだ。

連中はこの時を待っていたのだ。紅麗が成長し、順調に発育するこの時期を狙っていた。

女一人の力ではどうにもならない。複数の組員たちから押え付けられ、服を剥ぎ取られる。

泣き叫んでも助けなど来ない。何故なら組員全員がその場に集まっていたからだ。

文字通り紅麗は「廻された」全裸にされ淫らな格好をして喘ぐ日々……

組員からは予め避妊具の一つであるピルを飲まされていた。これによってどんなに膣内で射精されても妊娠はしない。

一度に15人以上の男を相手にする時もあった。その度に紅麗の心は碎かれ、肉体は白い欲望で汚された。

愛などない、誰とも知れない男たちとの淫らな宴。

知性も、理性も、自尊心も、全ての心と理は破壊され、ただ欲望を受け止めるだけの女に成り下がった。

いつ終わるとも分からない女として最悪の悪夢が現実へと姿を変える。

耐え難い屈辱の中で、紅麗は何度も自殺を試みた。だがその度へへの執着心が邪魔をし、成し遂げる事ができない。代わりに大きくなったのは、憎しみと言う巨大な殺意だった。

話しながら紅麗は泣いていた。そんな姿を見ているシンの視線が少々痛む。

淫らな女だと思われているに違いない。淫乱だと思っっているかも知れない……。

「ごめんね、だから私綺麗な女じゃないの。本当は汚れ過ぎている女なのよ」

シンに動揺している様子は無かった。ただ話を続ける紅麗を見つめている。とても優しい眼差しで。

紅麗は話を続けた。

「そんな生活は1年間続いた……正確に言うと、1年間で終わらされたと言う方が正しいかな」

その夜も組員たちの性欲を満たすため、紅麗はベッドの上で喘いでいた。

今となつてはもう痛みも感じない。その最中は出来るだけ自分を出さないように心掛けた。

「犯されている自分は本当の自分では無いんだ」そう思うことで激痛を苦痛に変えることが出来た。

その分、紅麗の心は壊れ、もはや再起不能に近いまでに達していたのだが……。

しかし今夜はいつもと違った。何が違うのかを表現する事は難しいのだが、雰囲気が違うのだ。

だが組員たちはそんないつもと違った空気など察していない。エスカレートした行為は徐々に過激になり

紅麗はベッドの両脇、四方から鎖で拘束され、磔の状態となった。

その上から男たちが覆い被さり、紅麗の下半身に欲望を満たしてい

く。

紅麗が本当の自分を隠すために、閉じていた目を静かに開いたときだった。

「うぎゃあああああつ!!」

「な、なんだお前は・・・ごえあああつ!!」

「なんだ!!」

「悲鳴だ!!」

廊下のすぐ向こうで断末魔の如き悲鳴が上がった。組員たちはベツドの脇から拳銃を取り出し、一斉に廊下へ出て行く。

その度に凄まじい悲鳴が轟き、時折液体が飛び散る音が聞こえてきた。

「がああああつ!!」

「ああああ・・・な、なんだよ・・・お前は・・・」

静かにドアが開かれた。こんな事は今まで一度も無かった。察するに誰かが侵入してきた様子だった。

しかし部屋は暗がりになっており、開かれたドアから誰が入ってきたのか良く見えない。

最後に部屋に残っていた4人が一斉に飛びのく、そして拳銃を構え引き金を引こうとした瞬間

凄まじい悲鳴が上がり、4人分の血液が天井に飛び散った。

「ああ・・・あああ・・・だ、誰・・・?・・・」

両手足を縛られている紅麗は起き上がることも出来ない。おまけに全裸だ。ほとんど丸腰同然である。

薄闇の支配する部屋に革靴のコツコツと言う音が響く。その音はなんと不気味な雰囲気醸し出していた。

足音はベツドの右側で止まった。紅麗は必至で目を開き、自分を見下している相手を見た。

しかし部屋が暗すぎてそれが誰なのか分からない。

しばらくすると突然、拘束されていた両手足の鎖が砕けた。どうやら見えないこの相手が鎖を切断したらしい。

自由になった紅麗は咄嗟に身を引き、ベッドの脇にあったライトのスイッチをオンにした。

「あ．．．あ、貴方は．．．．．」

そこにはウエスタンハットを深々と被り、真っ黒なスーツで身を包んだ男が立っていた．．．。

6へ続く．．．。

END

## 第二十四話 「それぞれの思い」(6)

「あ、貴方は……」

ウエスタンハットを被り、黒のスーツに身を包んだ男の手には刃渡り30センチほどの短刀が握られていた。

短刀は真つ赤に染まっている。そして男の顔にも返り血が飛び散っており。その表情は冷たかった。

少なくとも紅麗に見覚えは無かった。こんな男、組員では見かけたことが無い。

「ひっ！」

紅麗は自分の周囲を見渡した。夥しい返り血は部屋中に飛び散っており、四方八方が真つ赤に染まっていた。

首を切られ、未だ血が噴出していている死体。臓器が飛び出している死体。まさに地獄絵図だった。

紅麗は自分の身体を隠すものを探した。しかしどれも血がベトトリと付いており、使い物にならない。

男は微動だにせず紅麗を見ている。先ほどから何も言わない。

「貴方は……誰なの……」

「死神だ」

「し、死神!？」

「お前の死神ではないかな」

「別の人の……?」

「コイツらのな」

男は顔を右斜めに傾け、周囲の事だと示した。

「死神なら、人を殺すんでしょ?……」

「それが仕事だからな」

男は紅麗から見えないように短刀を上を持ち上げ、それを頭上に振り上げた。

「お前に恨みは無いが、悪く思うな。見られたからには生かして置

くわけには行かない」

振り上げた短刀が一番高い位置に登った時だった。

「殺して」

「なに？」

「死神なんでしょ？ だったら私を殺してよ」

男の動きが止まった。

「何故死に急ぐ？」

「こんな姿になってまで……生きたいなんて思えないでしょ！？」

紅麗は身体を抱きかかえながら叫んだ。悲痛な叫びだった。

「コイツらはお前の親代わりか？」

「冗談じゃない……私の本当の親は他にいる。もう死んじゃったけど……」

「そうか」

男は振り上げた短刀を降ろした。

「お願いだから早く殺して。楽になりたいの」

「気が変わった」

「なんですつてっ！！ なによそれ！！」

紅麗は男の胸倉に掴みかかった。

「あんた死神なんでしょ！？ だったら殺しなさいよ！！ 生きたくないの、殺して！」

「断わる」

「どうして？ 死にたいと思っていないコイツらは殺せるのに、死にたいと思っている私は殺せないってどういう事よ！！」

「俺は悪にしか制裁を加えない。最初お前もコイツらと同類だと思っっていたんだが、違うようだからな」

「バカにしてんの！！ ホラ、この手で殺しなさいよ！！ さあ、殺してってば！！」

紅麗は男の腕を掴んで叫んだ。

「だったら何故泣く？」

「えっ……」

自分でも気付かぬうちに紅麗は泣いていた。

「お前は今まで死にたいほどの苦しみを味わってきた。だがお前の本心は死にたいとは思っていない。その涙が何よりの証拠だ」

紅麗の中で何かが弾けた。それは今までもずっと認めたくなかった自分の意思。生きたいと思う強い意志だった。

「私は……私は……」

紅麗は名前も知らぬ男の胸に顔を埋め、子供のように泣き叫んだ……。

男は紅麗が泣き止むまで、その場を離れる事はなかった。

「待って!!」

男が屋敷を出て行く姿を見て、紅麗はすぐに服を身に纏い、外に出た。

「まだ何か用か？」

「貴方がこの連中の皆殺しにしたせいで、私の居場所が無くなってしまった」

男は何も言わなかった。

「これから私、何処にも行く場所が無いの。その責任取ってくれない？」

「どうしろと言うんだ？」

「私も一緒に連れて行って。行くところ無いし。それに貴方の事誰かに言うつもりなんて無いから」

男はしばらく紅麗の目を見た。そして……

「お前、名前は？」

「夜美也 紅麗」

「よみや くれい……変わった名前だな」

「貴方は？」

「黒神 歪……天誅、死神だ」

「貴方があの天誅、死神!？」

紅麗は天誅、死神の存在は知っていた。ここ数年になって突如として現れた死神。悪事の働くところに決って現れその場にいる全ての人間を惨殺すると言う悪魔……。「付いて来るのは勝手だが、俺の世界は死の世界だ。自分の身は自分で守れ」

「分かってるわよ。あつ！ちよつと待つてよ」  
歪と紅麗……二人の奇妙な生活はここから始まった……。

「それから私はここに来た。歪に連れられてね。最初は何をどうして良いのか分からなかったけど歪と接しているうちに彼の特性とか分かってきて……。中学を卒業して高校に入学する事も、歪は反対しなかった。高校3年間はこの場所からずっと通ったしね」

「なるほど、まだ若いのにずいぶん苛烈な過去を持っているな」  
ようやくシンが喋った。

「私に対する見方変わったでしょ？」

「どうしてだい？全然分からないよ。むしろ俺の目に狂いは無かったと思ってるけど」

「ど、どういう意味？それ」

「ん？ますます君の事が好きになったよ」

あまりにもストレートな告白……。紅麗は一瞬何を言われたのかわからなかった。

「バ、バカじゃないの！？け、汚れてるって言ったでしょ！」

「アハハ！耳まで赤くなってるぞ。かゝわいい」

「ちよ、ちよつとあんた！！」

「うそうそ、冗談。誰にでもいろいろあるものさ。何も背負うものが無い人間なんて、それこそ安っぽい人間さ」

シンはそう言うのと右手で紅麗の頭をポンポンと撫でた。

「さ、触るな！！」

紅麗はその手を払い除ける。本気で嫌がっているわけではないのだ

が・・・。

「ウハハハ！君と居ると飽きないな」

「バカにしてんだろ？私の事」

「す、少しだけ・・・」

「あんだとっ！！」

その時、入り口のドアが開き、歪が帰って来た。

「よう！お帰り」

シンが右手を上げて言った。

「ずいぶんと騒がしいな。下まで聞こえたぞ」

下とはアジトの一階にあるビルの入り口の事である。

「歪が居ない間シンと楽しんでたんだからね」

「そうか、そりゃ良かったな」

「むっ！！ちよっとは妬けよ！！」

「意味が分からん」

「んで、涼風杏里ちゃんはどっだったんだ？」

シンが聞いた。涼風杏里・・・この言葉に紅麗の耳がヒク付いた。

「別にどうと言うわけではない。そのうちまた会うことになるだろ

う」

「良かったわね、また会える口実があつて。さぞ綺麗な人なんでし

ようね！！」

「少なくともお前よりは大人だ」

「な、なにいゝ！！」

「紅麗ちゃん、結局君の方が妬いてるね」

余計なシンの一言である。

「五月蠅い！！！！！！」

奇妙な運命が手繰り寄せた奇妙な展開。

この先熾烈な戦いが待っている事を、まだ知らない・・・。

## 1 Mission最終話「ターゲット」

東南アジア北部。

急激な異常気象により、国土の40%が砂漠と化しつつある広大な土地の地下では

地上の世界とは比べ物にならないほどの物資が集められ、同じように広大な施設が埋まっている。

地上にある巨大なビルと広大な施設を、そっくりそのまま地下に運んだような空間。

そこには綺麗な水が引かれ、食料も豊富。様々な施設が地下に蔓延っており、その形相は蟻の巣のようだった。

施設の作りは全て特殊な金属とコンクリートで出来ている。そのため地上が地震などで崩壊しても

この施設には何ら影響は出ない。むしろ地震など跳ね除ける強度を誇っている。

男は地上の入り口から入ると、巨大なエレベーターで下に降りた。

目指す場所は地下24階。

施設への入り口はこの場所だけではないが、幹部以外の連中は皆このエレベーターを使う。

エレベーターの下には警備員が構えており、降って来た人間のチェックを行なう。

そもそもエレベーターに乗るには組織の許可証が無ければ作動されず、乗ることは出来ない。

しかしいつ危険が近づくか分からないため、警備には余念が無い。それが心螺旋のやり方だった。

地下24階に辿り着いた男は警備員のチェックをパスし、巨大な通路を進んだ。

その道程には様々な部屋があり、その中では様々な実験が行なわれている。勿論、全ては非合法である。

だからこそ心螺旋の本拠地は地下にあるのだ。地上では目立つために出来ない実験でも、ここでは容易に行なう事が出来る。

麻薬売買で集めた金を資金とし、心螺旋は今日も世界各国で暗躍を続けている。

世界中の警察が心螺旋を追っているが、この場所はまだ嗅ぎ付けられていない。発見する事は困難だろう。

男は「幹部室」と書かれた部屋のドアを開けた。部屋の中では心螺旋のトップたちがU字型のテーブルの前に座り

正面に映し出されたスクリーンに目を向けていた。スクリーンには天誅、死神。黒神 歪の写真が映し出されている。

「この男が天誅、死神の正体。本名は黒神 歪。数年前から日本の裏社会で暗躍しており、我々の仲間も何人が殺されています。

主な武器はショットガンのようなようですが、他にも様々な武器を使用します。身体的にも優れた肉体を持っており、洞察力、運動神経

行動力、そして攻撃力共にかなり高いレベルを持っております。今現在我々の活動を妨げる最有力者です」

スクリーンで紹介しているのは女だった。ダークグレーのスーツを着ており、秘書のような風貌である。

スクリーンは続いて紅麗の写真が映し出された。

「夜美也 紅麗。彼女は黒神のパートナーとも呼べる人物で、実行犯ではなくブレインの役目を担っております。

優れた計算力と持ち前の知識を活かしていつも黒神をサポートしています。今回のザスター撃破も

彼女の勘と行動力があってこそ成し得た事だと言えます。実際問題彼女が居なければ、ザスターは死なずに済んだでしょう。

黒神と比べると脅威度は下がりますが、彼女の存在もまた大きいと言えるでしょう」

更に画面は切り替わって今度はシンの写真が映し出された。

「シン・マイズナー。中国人とフランス人の両親を持つフランス系中国人です。元は中国最大のマフィア、ブラッディ・マリーのリー

ダーでしたが

現在はブラッディ・マリーを引退し、黒神と同じように我々を追っています。今回のザスターの一件で黒神と合流しており

事実上、黒神に続く脅威度です。所持している武器は日本刀で二刀流。身体的にも優れており、何より身のこなしがかなり優れています。

スピードだけなら黒神よりも上と言うデータが出ています。日本刀だけでなく、テコンドー、空手、太極拳なども極めており肉体系格闘技もこなします。

黒髪とこのシンが合流した以上、連中の力は測定不能にまで達します。我々にとつてこの上ない脅威となる可能性が極めて高いと言えます。以上です」

スクリーンの電源が切れ、部屋の電気が灯った。

「涼風杏里のほうはどうなっている？」

U字型テーブルの中央に位置する場所に座っている男が聞いた。

「連中は涼風杏里とも接触しています。ですが、彼女に関して目立った動きはまだ無いようです」

今度は別の男が言った。

「身の程知らずとは言ったものだが、こんな連中が我々の脅威になるとは思えんがな」

「しかし現に連中はザスターを撃破している」

「フン！ザスターなど我々からしたら虫けら同然だぞ。だからどう言う訳ではない」

「いかがいたしますか？アイバース議長」

アイバースと呼ばれた男は両肘を突き、顎を支えたまま黙っている。「いずれ何らかの手を打つ必要はあると思うが、今はまだその時ではない。わざわざ我々が動かさずとも連中は砕ける。」

心螺旋はそこまで軟弱ではないからな」

「仰るとおりです」

「そうですな」

「ジェシカ」

アイバースがそう言うと、部屋の置くから一人の女が現れた。

「もし、連中が何らかの動きを見せたときは今度はお前がやれ。ザスター程度では手に負えないようだからな」

「分かりました」

「おお、ジェシカを動かしますか」

「ジェシカは我が心螺旋、特技隊3巨頭の一人。彼女に任せておけば安心だ」

「仰せのままに・・・」

そう言うとジェシカは暗がりになくなって行った。

「討伐抜擢おめでとう」

「死四、お前か」

そこにはジェシカと同じ特技隊3巨頭の一人、死四しよんが立っていた。

「俺たちが動くまでもないと思っていたんだが、腰抜けザスターが殺られたとあつては動かざるを得んか」

「ザスターなど小悪党に過ぎん。私が受け持った以上、次に動きがあつた時が最後になる」

「相変わらず凄まじい自信じゃねえの、それに相変わらずムカつく女だぜ」

「残滓、貴様か」

「ククク・・・てめえなんかやらなくても、俺様が出向けばそれで終いなのによ。幹部の連中は頭が悪いな」

廊下の奥から3巨頭最後の一人、残滓ざんしが姿を現した。

残滓は隔世遺伝によってライオンと人間の遺伝子が融合した姿をしている。常にフードの付いたマントを纏っていないければ

その姿では外を歩けない。一報の死四は通常の間タイプだが、我ら心螺旋の財力と最新のテクノロジーを駆使した手術によって

身体の9割が鋼鉄で出来ている。そのため死四には銃器や刃物は一切通用しない。

「貴様は相変わらず醜いな」

「ケツ！青臭せえ女に言われたくねえよ。3巨頭を2巨頭にしてやるるか？」

「お前が私を？フツ……笑わせる」

「なんだあ！！」

「よせ、二人とも。ターゲットは別のはずだぞ」

死四が制した。

「フン」

「連中とはいずれ戦うことになるだろう。ヤツらの首を意の一番に見せてやるよ」

「クククク……そいつは楽しみだぜ。足元すくわれんなよ！！」

「だがジェシカ、あまりヤツらを見くびるなよ。特に黒神とシンは要注意だ」

「分かっている」

心螺旋の動きは着々と進められていた……。

「んで？どうするんだ、これから先」

「別にどうもしない、いつも通りの生活を送るだけだ」  
シンの問い掛けに歪はそう答えた。

「特に何もしなくても、いつかカチ合っ……か」

「そう言うことだ。これだけは避けられん」

「でもさ、心螺旋って未だに良く分からないよね。調べようにもデータが無いし」

「別に良いさ。成るように成るだろうからな」  
歪が言った。

「それはそうと、お前はこれからどうするんだ？」

「俺？そりゃ勿論、ここに住ませてもらっせ」  
シンがおどけて言った。

「本気だったのね」

「そりゃそうさ、だってえ〜行くところないし〜」

「家賃払いなさいよね」

「うっ!!そ、そりは・・・」

「やれやれ・・・勝手にしろ」

「あれ?歪、どこ行くの?」

「次の仕事だ。依頼が入ってるぞ、知らなかったのか?」

「ええっ!!!そうだったけ!?!」

「まったく・・・どいつもこいつも」

歪の悩みの種は増える一方であった。

ジャツジマスター 1 Mission The End

The Next Day 2 Mission Start!!

1 Mission最終話「ターゲット」(後書き)

物語は2 Missionへと続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7702g/>

---

ジャッジマスター ~ 1 Mission ~

2010年10月26日09時02分発行